俺が生み出す虚無の世界

音舞羅　阿瑠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺が生み出す虚無の世界

【Ｎコード】
Ｎ８４５８Ｋ

【作者名】
音舞羅　阿瑠

【あらすじ】
西暦２１３７年
舞台は日本とヨーロッパ。

宗教　科学　意識　技術　自然破壊　神
記憶　戦争　心　人類　計画　消滅

国家　　事件

目が回る。頭がくらくらする。
意識の奥底から声がする。
自分の名前を呼ぶ声
真っ黒な気配
自分の中のもう一人の自分
自分の中の悪魔
楽しい記憶、悲しい記憶

「戦い、争い　醜き人間の、醜き人間の…破滅の時」
「俺がいる限り！　世界は終わらなければいけないんだ！」
「もう、帰ろ？」
「私のこの力を使えば…」「でもそれじゃぁ」
「俺が…俺が…やったのか…あぁあぁぁぁぁっぁぁぁぁあ」
「そうだ、お前がやったのだ！」
「きっと…俺が消えれば…それが一番…いいんだ」

？　ー明日へ向かう旅路ー　？章ー人工能力者ーchapter1

科学と意識？

第1章「人工能力者」

「はぁ・・・」

朱雀　霧也は深いため息をついた。

霧也の目の前には、一体の死体。傷口からはとめどなく血がながれている。

「また、殺したのか。人を。俺は何人人を殺すのだろうな。アクア」

「きりや・・・あなた・・」

アクアといわれるその剣はいきなり人の姿に変わり

言葉を発した。

「ん・・？」

「ん・・？ふわぁ・・あれ？夢？」

霧也は、目を開け大きな伸びをする。

窓に目をやればすごくまぶしい。

「朝か・・・いやな夢。見たな。」

霧也は、ゆっくりとベッドから立ち上がり着替えを済まして

階段を下り、食卓についた。

「おはよっきりやっ！　ご飯。作っといたよ」

エプロン姿の女性が食卓についている。

食卓にはザ・朝食というような料理がならべられている。

「アクアさ、しょっちゅうこっちに来てるけど大丈夫なのか？」

「大丈夫だよっ　向こう側には残留意識残してきてるしさ」

霧也は話しつつも早急に食事を済ませ

いってきますと告げると家を飛び出していった。

コンクリートでしっかり舗装された地面。

あたりいっぱいに立ち並ぶビルや学校。

霧也は歩きながらそんな景色をなんとなくみていた

学校が１０個近くたっているせいで自分の学校を見失いそうになったが

なんとか見つけた

「ふー着いたな。」

兵庫県立ＰＳＩ中学校

その名の通り超能力者が集まる学校だ。

霧也は能力者ではないが、なぜかこの学校に通っている。

「ちょっと待ちなさい！」

突然後ろから声をかけられた。

「ん？誰だぁ？・・・って、古園美佳か・・めんどくさいなぁ」

「めんどくさいじゃないわよっさぁ、３５０回目の勝負よっ」

古園美佳の体に電気が帯びている。

彼女はその電気を手に集めて、霧也に向けてうちはなった。

「しょうがないなぁけがしてもしらないよ？」

（騎士霧也。戦闘起動開始。脳内回路を秒速１０ｋｍに切り替え。
攻撃予測開始。
電撃は１秒後に霧也を直撃。右横２ｍに回避）

霧也は横に跳躍。電撃はものすごい勢いで祐輝のよこをかすめてる。

「なんでよけれんのよっ！なら！これでどう！？光速１ｋｍの電撃よっ」

また彼女の周りに電気が帯びる。しかしさっきとはまるで違う量の電気だ。

その電気のせいであたりのお掃除ロボや電灯は次々に破壊されていく。

「霧也！　生意気なのよ！　なんでよけれんのよっ　なんでそんな早いのよ！！」

彼女の胸の前に雷を集中させ、それをビームのようにうちだした。

（攻撃予測開始。０．１秒後に電撃は霧也に直撃。上方５ｍに回避。失敗。電撃は０．０５秒後に霧也を直撃。思考を攻撃・防御に切り替え。一番有効な防御策は、結界。）

霧也は０．０１秒で魔法陣を宙に書いた。

「結界術。身体防御強」

その魔法陣は霧也を丸めこむ。

それとほぼ同時に電撃が到達。

「どうよ！これであたしの勝ちね３５０回中１７５勝１７５敗。そして１７６勝目は私の物よ！

あっはははははは！！！！」

彼女は声高らかに笑っている。
煙がだんだん薄くなる。まだ電撃があたりを走っている。
うっすらとした煙の中に人影が見える
（思考を運動・攻撃に切り替え。体の運動制御を解除し、前方にとびます。
速さ分速１０ｋｍに制御。目標の目前で停止。その後攻撃に移ります。）
煙と電気の中から祐輝が飛び出してきた。だが、早すぎて彼女にはよく見えない。
（目標に到達。停止。運動制御をかけ、攻撃に移ります。）
「力は抜いておくぞ。」
霧也は彼女を軽く殴った。
そして彼女は勢いよく飛んでいく。
（運動制御解除。目標の保護に移ります。秒速１０ｋｍの速さで彼女の背後にまわりこみます。）
彼女は霧也の体で受け止められ、けがはしなくてすんだ。
「なんで、なんであれを防げたのよっ　しかも、あの速さ・・・」
（運動制御をかけ、脳内回路を通常の速さに固定。戦闘終了の為、

騎士霧也戦闘起動終了。クールダウンします。次回戦闘起動可能時刻は３０分後です。）

「さ、行くぞ。いくら数秒の勝負とはいえ、遅刻ギリギリの時間なんだから今は・・・」

（２１３７年５月３日午前８時２８分。学校が始まる時刻は午前８時３０分）

「今は８時２８分。あと２分しかないよ。」

霧也は彼女を立たし、校門をくぐっていった。

「え。ちょっ！待ちなさいよっ！・・・・おいてかないでーっ！！」

？　―明日へ向かう旅路―　？章　ｃｈａｐｔｅｒ２（前書き）

？章のｃｈａｐｔｅｒ２です。

？　ー明日へ向かう旅路ー　？章　ｃｈａｐｔｅｒ２

彼女と霧也は急いで教室にかけこんだ。
席に座ったとほぼ同時にチャイムが鳴る。

ギリギリセーフ
「はぁ。はぁ。。霧也、あんた走るのはやすぎ。」
彼女は息をきらし、肩で荒々しい呼吸をしている。
その横に座っている霧也は平然と汗ひとつかかず呼吸も乱れていない。

「そんなことないよ。第一さ、毎朝毎朝勝負仕掛けてきやがって。
いい加減にしろよな。。あ・・・」

教室のドアが開き、先生と思われる人が入ってくる。
が、姿が見えない。

「あれ・・先生―どこですかー（棒読み）」
「ここですの。もう、霧也くんは毎朝毎朝どんだけ先生をからかえば気が済むですの？いい加減にしてくださいですの」

姿が見えないけれど声がする。
なんとも奇妙なことだ。まるで石に隠れているコウロギのようだ。

「よいしょぉっと　これで見えるです？」
先生は教卓の上に立った。

教卓の上に立つというのも考えてみればおかしな行為だ。

だが、この先生はあまりに小さい。
それを考えると自然なのかもしれない。
（前方の人物の身長を測定。３０ｃｍ。高さは豚羊に相当。）
「先生―何でそんなに身長が低いんですかー３０ｃｍ。豚羊相当ですよー」
霧也は脳内演算機能で導いた身長を先生に告げた。
「もう、霧也くん？君は能力をそんなことに使うのです？」
「すいませんすいません、どうぞ、ショートホームルーム。始めてください」
ここでは、霧也は脳内であらゆるものを演算することができ、それをもとに
体を動かしたりできる能力を持っている。ということになっている。
もちろんこれは超能力なんかではなく、騎士ならばだれでも持っている
脳内演算機能だ。
「起立。気をつけ。礼。」
｛お願いします｝
挨拶をすませると、先生の長い話が始まった。
生徒はというと、雑談を交わしたり宿題をしたりとやりたい放題だ。
霧也と美佳は先生の話をまじめに聞いている。
そのせいか、先生からは異常に好かれているらしい。

（時間予測。この話の長さを予測します。開始時刻８時３５分。このペースで話し続けると終了時刻は８時４５分。１０分後）

と脳が時間を０．０１秒で予測する。

ふと窓側を見ると、ビル街が見える。何も変わらないビル街。

自然というものはあまりなく、人口はたったの３万というのがこの街だ。

そしてその８割が学生。一種の学生都市と化している。

昔は自然がいっぱいだったらしいのだが、それは１００年以上も前の話だ。

（警告：前方からチョークと思われる石灰の物質が秒速５ｋｍの速さで飛来。）

脳内メッセージに気付いたころにはもう遅かった。

霧也の額にチョークがあたり、くだけた。

「霧也くん？今重要な話してるですの。ちゃんときくですの。」

「い・・・っつつ・・はい。すいません」

どうやらチョークを投げたのは彼女のようだ。

「霧也君の為にもういっかい言うですの。最近不審者が出ているのですの。特徴は

赤く長い髪。黒いコート。銀色のナイフ。そしてそのナイフは喋るらしいですの。」

（特徴認知。検索をかけます。該当者１名。市谷　宗と一致。）

≪なんだって？市谷。宗？まさか、まさかこんなに早く敵の情報がつかめるとは・・≫

おどろきの色を隠せない霧也の顔には汗がつたう。
「どうしたのです？霧也くん、顔色悪いですの」
「あぁ。はい大丈夫です。少し疲れてるみたいで…」
霧也は、思わず顔を伏せた。そしてほんの数秒思考を巡らせた。
そして、小さく不気味な笑みが霧也の顔に浮かんだ。
そしてそのままショートホームルームが終わった。
「ねぇ、あんた大丈夫？不審者の話聞いたとき顔が怖かったわよ？」
「ん、美佳か。大丈夫だよ。さっきも言ったけど疲れただけだって。」
霧也は、やさしい頬笑みを作った。
目の前にいる美佳は心配そうな顔をしている。
「心配すんな。不審者なんて、おれがコンマ１秒で倒してやるよ」
霧也は美佳の頭をやさしくなでる。
美佳は顔を真っ赤にしている
「しっ！・・心配なんて、して・・ないんだからっ！変なこといわないでよっ」
「はいはい。」
霧也は軽く流した。
はっきり言ってこんな彼女を見るのは初めてだったのだ。
もっと反応をした方がいいのだろうかと０．１秒ほど考えたが、
キャラ崩壊につながるのでやめた。

「あ、そうだ。美佳ぁ今日から家まで送るわ。危ないだろ?女の子が一人ってのは。さっきの話聞いたら、心配だからさ」

「べっ!・・べつに、あんたなんかに守ってもらったって・・それに、自分の身くらい自分で守れるわよっ!で、でも・・・ありがとう」

美佳は顔を真っ赤にしている。
彼女の口からありがとうという言葉はめったに出てこない。

いつもとがっているが、こういう一面もあるのだなと霧也は思った
「じゃぁ放課後校門前で待ってるからな。」
「う、うんっ」

――――――――放課後――――――――

(周囲確認。学校近辺に市谷　宗の意識エネルギーがあるか調べます。
・・・・・市谷　宗の意識エネルギー感知できませんでした。残留意識。痕跡すべて無。
よって、学校近辺に市谷宗が訪れた痕跡はありません。)

祐輝は校門の前で美佳をまつ間に意識感知を行ってみた。
今日は脳の調子が悪いのか3秒コンマかかってしまった。

「ふー。学校には来なかったか。よかった。」

「霧也、待った？」

感知を終えてちょうどに美佳が来た。

「んー数秒待った。じゃ、行くか」

霧也と美佳は夕暮れでまだ明るい道を歩き出した。

時刻は午後６時夕方と夜の境目。

あたりは淡いオレンジ色に包まれていた。

「なぁ美佳、なんでさ同じ超能力者同士で争いがあるんだ？最近ニュースでよく見るけど」

霧也は歩きながら彼女に質問した。

「んーとー。これは噂レベルの話なんだけどね？　最近ここらの研究所で人工能力者計画ってのが進んでるらしくてね、それでその人工能力者が能力者を殺してるらしいよ」

彼女はあくまで軽い口調で言う

「人工能力者かぁ。今度調べてみるかな。」

「まぁ、あくまで噂レベルだけどね…ねぇ…その調べ物、あたしも一緒にいい？」

彼女は霧也の顔を覗き込みながら聞いた。

彼女はどこか真剣な表情だ。

「うん。いいよー。…じゃぁ明日休みじゃん？学校。明日さっそく調べようよ。時間は午前９時から」

「うんっ！わかった」

（目的地到着しました。ルート演算終了します。）

話している間に家についた。
あたりはもう真っ暗だ。星というものはこの空にはなく、ただ暗いだけ。

その空に霧也は一瞬光るものを感じた。
（警告：半径２ｋｍ以内に攻撃反応感知。あと2秒後に攻撃は祐輝に到達。早急に騎士霧也を戦闘起動いたします。）
攻撃はもう見える範囲にまでせまっている
（戦闘起動開始：脳内回路を秒速１０ｋｍに固定。思考を防御・攻撃に変更。攻撃種類感知。爆撃と認識。）

霧也は美佳の前に立ち、魔法陣を宙に書いて防御結界強をはった。
魔法陣は霧也と美佳を包み込む。

それと同時に爆撃が到達。
「ふー。間に合った。美佳、危ないから下がってて。」
「う、うん。」

霧也は彼女を結界で包んだ。
先の爆撃の煙の中からうっすらと人影が見えた。
「私は製造番号７７９．人工能力者計画７７９番目の検体。」

「人工能力者計画。。まさか、本当だったのか」
（思考を運動・攻撃に切り替え。運動制御解除。運動速度分速１０００ｍに固定。目標捕捉。）

霧也は、分速１０００ｍの速さで目標めがけて飛んで行った。
製造番号７７９は、宙を飛んでいる。

霧也の能力なら、飛ぶことは簡単。そしてすぐに追いつく。
（攻撃開始。）
霧也は、思いっきり779を殴った。

だが、それはどういうことか空気を殴っただけだった。
「後ろです」
霧也はとっさに後方を振り返った。

779はいつの間にか霧也の背後にまわりこんでいた。
「テレポーターか！だけど、さっきの爆撃は！？」

「空気中の酸素を分解。水素生成。空気中の膨大な酸素と混合・・・」
霧也はなにか不吉なものをかんじた。
（警告：水素と酸素の混合は水素爆発を引き起こします。爆破時間予測・・・0．1秒後。回避。失敗。）

脳内メッセージが回避の失敗を告げる。
「よけれないっ！」
―爆発―

結界で包んでいたもの以外が焼き尽くされた。
もっとも、結界で包んでいたのは霧也以外。この街全体だ。
（警告：意識エネルギーで傷の治癒をお勧めします。）

≪だめだ。ここで意識エネルギーを使ってしまったら・・・≫
意識エネルギーとは騎士である象徴。まぁ、人間みなもっているのだが
それを引き出せるのは騎士として訓練を受けた者のみ。

ここは超能力者の街。騎士とは敵対している。使えば霧也は捕まるか追放されるだろう。

≪ここは、どうする。相手は人間だ。斬るわけにもいかない。それに騎士剣も出すわけにはいかない。演算機能、身体強化だけで能力者を倒さなければならない。しかも相手はテレポーター。そして空気中の物質を操る。。≫

「目標撃破確認。検体７７９。実験終了。早急に研究所へ帰還します。」

（目標・半径２ｋｍから脱出。目標をロストしました。戦闘起動終了。運動制御をかけ、脳内回路を通常の速度に固定。騎士霧也戦闘起動完全終了。次回起動可能時刻。３０分後です。）

「霧也っ！大丈夫！？」

美佳が霧也のもとにかけよってきた。

視界がかすんでよくみえないが、かすかに美佳の声が聞こえた。

「美佳…あいつは…？逃げたか…ていうか、誤爆したのか？…それより、あの計画は噂じゃなかったね。ほんとにあった。明日から、念入りに調べないと。」

「霧也、あんまりしゃべっちゃだめ。傷だらけなんだからとりあえず傷の手当てしないと。」

彼女は霧也をとりあえず家にいれ、ベッドに寝かせ

病院には行きたくないという本人の要望により

治癒能力者の安藤　美咲がやってきた。

そして、美咲の能力で霧也の傷はふさがった。
「ありがとう。美佳、安藤。おかげで傷は治ったし、わがまま聞いてくれたし。ほんとうにありがとう」
霧也はそっと微笑むと、そのまま眠ってしまった。
美佳と美咲は顔を見合わせてそっと、幸せそうに笑った。

？　―明日へ向かう旅路―　？章　ｃｈａｐｔｅｒ２（後書き）

ここ適当に作りすぎですね
ごめんなさい

この小説はねー僕の４作目だよー
今みると
掲載するっていいもんですね
見てもらえるといいんですけどね＾＾

では、感想お待ちしてます
批判もどんとこいです

？　ー明日へ向かう旅路ー　？章ー意識界ー（前書き）

はいっ来ました
？章やよーっ
今回は苦手な平和ぱーとｗｗ
あははｗどうなるんでしょうねｗ

？　ー明日へ向かう旅路ー　？章ー意識界ー

「ふ～」
アクアはそっと溜息をついた。
昼間意識界に戻ったアクアは独自で調べ物をするため図書館に来ていた。

中央図書館にはものすごい人だまりができているため
なかなか資料室に向かえない。
「もうっ！なんでこんなにこんでるのぉ！？」

資料室まであと２００ｍちょいの距離。
普通ならすぐにでもむかえるのだが、この人ごみの中では１ｍ進むだけでも難しい。

「どいてくださぁいっ！うにゅぅ・・・どいてーっ！・・・・・・・すぅー・・どけやこの野郎っ！こちとらいそいどんじゃぃっ！」
キャラ崩壊。おしとやかキャラが崩壊。

そのギャップに人々は驚き、おもわず道を開けた。
「ありがとうございますっ☆」
アクアは、さっさと資料室に入り端末を起動させた。

端末の操作は簡単。ボタンをタッチするだけだ。
調べ物のキーワードをボタンで入力。出てきた情報をボタンをタッチして開く。

簡単だ。
だが、アクアは機械音痴。

「えっと、ボタンを押してキーワード入力すればいいのよね。うん。簡単簡単♪・・・・・ボタンなんてないじゃないっ。。え、え、どこ？ぼたんどこぉぉぉぉ？」

周りにいる人はみな自分の調べ物に没頭し
アクアが困っているのにも気づかない。
「はぁ・・・」

「あの、すいません。この画面をおせばいいんですよ。ボタンっていいますけど、出っ張っているわけでもないのです。この画面で調べたいものをおせばいいのです。」

世の中捨てたもんじゃない。アクアは大げさにそうおもった。
言われた通り押してみると、なんとか検索できた。
「ありがとうございますっ！お名前は・・？」

「九條　音無と申します。では、失礼いたします。」
アクアは一瞬見とれた。
だが数秒で我にもどった。

そして、端末のほうに向きなおり、調べ物を進めた。
「市谷　宗っと・・・」
キーワードをいれると、ものすごい量の情報がでてきた。

やはり大戦の英雄となればものすごい情報量なのだろう
噂レベルの話から、事実まで。

幅広くありそうだな。とアクアは思った。
片っぱしから情報を開いてみていった。
さすがは中央図書館。かなり良質な情報があると感心した。

だが、既知のものばかり。
大戦後のことなんてちっともかかれてはいない。
それもそのはず、市谷　宗は大戦後失踪したとされているのだから。

ならば過去の情報をとアクアは粘ったが
結局これといったものはみつからなかった。
「はぁ・・・やっぱりこの情報量でも有力な情報は得られないかぁ。
帰ろうかなぁ」

アクアは苦労して入った資料室を出た。時計を見ると
だいぶ時間がたっていた。現在はもう６時。
ここに来たのは昼の１時だ。

６時。閉館時刻１分前。
さすがにこんな時間になれば人込みはなく
すいすいと外にでれた。

外は霧也の住む町とほとんど変わらない。
ビル街が立ち並び、人でにぎわっている。
だけどちがうとこがひとつ。ここには自然や空などない。
ビルだってすべてにせものだ。

人間の意識エネルギーで形成された偽物の世界。
それが意識界だ。
人の意識によって形成され、人の意識によって消滅する。
ここには人の意識が住まうのだ。

その意識の姿を人は意識体とよぶ。
「そろそろ家にかえんなきゃなぁ～しばらくは人間道には出れそう

にないや」
アクアはコンクリートに舗装された道をあるいていった。
この道もこの建物もすべては人々の意識によって作られてるのかと
アクアは思った。
人々が消そうと思えばこんな世界。すぐ消せるんだな。
とも・・・
そう思うと溜息がでてくる。
「はぁ・・すぐ消えるはかない世界。。かぁ。ま、考えててもしか
たないよね。」
今頃霧也はどうしているのだろうか。アクアはそんなことを考えた
りして気を紛らわした。世界のこと考えててもどうにもならない。
だが最近アクアは常にこの世界のことを考えてしまっている。自分
が生まれた世界なのだから仕方がないことなのだが。

それでもそんなことを考えて心配して気落ちしている自分が小さく
思えてくるのだ。
家に帰るまで騎士剣アクアはそんなことを思っていた。
家の前につくと、誰かがたっていた。
その顔には見覚えがあった。
「あ、アクアさんですね。先ほどの九條と申します。忘れ物があっ
たんで届けにきました」
さっき（といっても数時間前）中央図書館で端末の操作を教えてく
れた人だ。

「あ、すいませんっ！ＩＤカード…うっかりしてました。」
ＩＤカードは個人情報のかたまり、名前から住所、電話番号、すべてが記載されている。
これを落として、悪い人に拾われたら最後。家を荒らされ、物を盗まれ。
いろいろな被害にあう。

この人に拾われてよかったなとアクアは思った。
「ほんとにありがとうございますっ　あの、九條さん…もしよければメールアドレス交換しませんか？」

アクアは赤面しながらアドレス交換を交渉した。
すると、九條はすんなりＯＫ。アクアはすごくよろこんだ。
そして、翌日会う約束をしたのだった。

アクアの心には、一種の感情が芽生え始めていたのだが、本人はまだそれに気づいていない。
明日楽しみだなと思い、まだ早いけどアクアは寝ることにした。

翌朝、アクアは早起きだった。よほど楽しみなのだろう。
窓からやわらかなひざしが差し込む。このひざしもすべてがつくりもの。
でもアクアは今はそんなことを考えてはいなかった。

とにかく楽しい気持ちでいっぱい。
早く時間になればいいな。そんなことを考えていた。
「私今日どんな格好していこうかなぁっ♪お気に入りのコーディネートにしていこう♪」

るんるん気分で着替えを済まし、鏡の前で笑って見せる。
「よしっ！いってきますっ♪」

そしてドアを勢いよくあけ、誰もいない家にあいさつして歩き出した。
今日の街は一段と明るく見えた。朝だから、というだけではなく
今日のアクアのこの気分がそうさせるのだろう。

木々の葉は強い日差しを受け、力強く明るく光っている。
アクアは今日は空でも飛べるかのような気分。
鳥のようにどこまでも自由に。そう、あくまで自由に。

？　ー明日へ向かう旅路ー　？章ー意識界ー（後書き）

はいよーっと
平和パートどうなるかと思ったら
結構いけてたもんですね
苦手だけどw
いいわけごめんなさいね

あのですね、これね執筆ペースが遅いから
公開も遅れると思います。すいません。

？　―明日へ向かう旅路ー　？章ー調査：一時の安息ー（前書き）

えっと、どこかで分割しようかなーとかんがえたんだけど
きれるとこみつからないｗｗ
んで３章は分割なしでいきますね
あと、≪≫内の文字は登場人物の心の叫びです

？　ー明日へ向かう旅路ー　？章ー調査：一時の安息ー

――――3章　調査．１時期の安息――――

「ん・・おはよう。みかぁ・・ふわぁー・・」
例の７７９襲撃翌日。
霧也は美佳のベッドの上で目覚めた。時刻は午前８時。
窓からやわらかい日差しが差し込んできている。さわやかな朝。

「あ、おはよう。体調はどう？痛んだりしない？」
霧也は包帯が巻いてあるところをさわってみた。
傷は完璧にふさがり、たたいても痛くもなんともない。

「うん。大丈夫だよ。昨日美佳と安藤がなおしてくれたし。」
結果的に直したのは安藤なんだけどと美佳は思った。
でも美佳は静かに笑った。

「ご飯、できたわよ。あんたの口に合うかわかんないけど」
霧也は目をキラキラさせてありがとうと言い、食卓についた。
美佳と顔をあわせ朝食を食べるなんて変な気分だ。

「いっただきますっ！」
「はい、いただきます。」
美佳は、食べずにじっと霧也の顔をみた。

霧也はそんなのおかまいなしに食べている。
「どう？」
「このオムレツ…すごいおいしいっ！お味噌汁も、ぜーーんぶおいしいよっ！」

美佳は顔を真っ赤にして、うれしそうに食べ始めた。
その間に霧也が美佳って料理作れたんだねと言うので、
ばかにしないでよとたたいた。

二人カップルのように一緒に笑い、楽しい時間を過ごしている。
「ごちそうさま」
「お粗末さま」

霧也は自分と美佳二人分の食器の片付けをしている。
美佳はいいと言ったのだけどあんなおいしいご飯ごちそうしてもらったんだからお礼だよ

と言って、エプロンをつけ食器を洗っている。
美佳はその姿に我をわすれてうっとりとしてしまった。
「なぁ、美佳。調べ物。どうする？」

その問いかけに美佳はふっと我に返った。
「んーとりあえず図書館に行って、研究資料さがす？」
「でも、あるの？そんなうわさレベルだった話だよ？極秘とかじゃないの？」

その通りだ。
噂レベルの話の研究資料が図書館にあるとは思えない。
あればそれはある種の奇跡というもので、そんな奇跡はおこるはずがない。どこかの安いアニメじゃあるまいし。と霧也は思った。

「それがねー。ふふふ・・・あの図書館の資料室に一部屋だけ床が開く部屋があるのね？そこなら、たぶんあるんじゃない？」
「なんでそんなことしってるの？」

「それなら簡単。なんか、歩いたら、明らか音がちがうからなにかなと思ったら床があいた。それだけ」
美佳のこういうところはすごいのかすごくないのかわからない。
たとえそれが本当だったとしてものすごくあやしい。
絶対危険だ。こういうところには昔からなにかあるときまっている。
でも、あやしいからこそそこにありそうな気はするが・・・
と霧也は考えた。
「まぁ、行ってみるか。危ないとおもったら引き返すよ?」
洗い物がすべておわると、エプロンを脱ぎ
さっそく二人で図書館にむかった。
休日の図書館は普段ならすごいこんでいるのだが
この日はなぜかすいていた。ある意味都合がいい。
その床が開くという資料室に入り、ドアをしめた。
「えっとーたしかぁー・・あったあった」
美佳は床をたたいて、明らかに音のちがう場所をみつけ、
そこを思いっきり蹴った。すると、床が開いた。
そこは真っ暗で、不気味だった。
正直入るのに少しだけ抵抗があった。
美佳はそんな霧也を置いてさっさとはいってく。
霧也も続いてはいった。
「暗いなぁ。そうだ美佳の能力で明るくできないか?」

美佳の能力は静電気を増幅させ電気に変える能力。
応用すればランプの変わりになりそうだ。
「できるわよー」

美佳は目を閉じて集中すると、自分の体と壁に手をふれた。
すると、壁からは電気がほとばしり、美佳の体にも電気が帯電している。
明るくなったその穴の壁にはいろいろな文字が刻みこまれていた。
「学生都市。兵庫第2層…」

「どういうこと？・・・ま、進んでいけばわかるかっ」
二人は第2層というこの穴の階段をどんどん下っていく。
下っていくにつれてどんどん広くなっていった。

二人は広場らしきところにでた。
そこには家や研究施設が立ち並んでいる。まるで街のようだ。
しかも家の数はやたら少ない。2件ほどしか家と思われるものがなく
他の建物は研究施設と思われる外見のものばかりだ。

おそらく研究につかわれているのだろう。あながち二人は間違って
はいなかったのかもしれない。

「2層っていうのはこういうことか。地下街なのかもな。ここは、

しかもあれもそれも、たぶん研究施設じゃないか？上の研究施設と見た目そっくりだし。たぶん、人工能力者の研究も、ここで・・・・」

霧也はまさかこんなべたーなことはないだろうと内心おもった。
二人はこの明るくても不気味な地下街（？）を歩きだした。
まっさきに研究施設に向かおうかと思ったが危険なのでやめた。

とりあえず二人はここを探索することにした。
もしかすると壁に刻まれたもじやらなんやらからいい情報が得られるかもしれない。

人をつくるなんてことは許されるはずがない。なんとしてもとめなければと
霧也は強く思った。
人にみつかったりしないかと心配になったりしたが運よく人は一人として見当たらない。

≪研究は夜に行われているのかな？≫
「ねぇ霧也。ちょっと来て」
霧也は美佳のもとに駆け寄った。
何か見つけたのだろう。

「これ、なにかな。Ｎｏ１　ｗａｓ　ｂｏｒｎ　ｉｎ　２１３７

Ｍａｙ　１７・・」
「Ｎｏ１・・・おそらく人工能力者の検体第１号だろう。その生まれた日みたいだけど。。つい最近だね。」

５月１７日。今は５月２０日。最近どころか３日前だ。
「５月１７？霧也、これってさ例の不審者が出始めた時と同じだよ。」
例の不審者。この言葉に霧也は敏感だ。

≪市谷が兵庫に現れた時と同時期。≫
一瞬思考を巡らせ、一の答えにたどりついた。
おそらくこの研究の背後には市谷がいるのだろう。

だとしたら同時に敵を討つチャンス。
霧也にしたら願ってもないことだった。
「たぶんその不審者が絡んでるな。よし、これがわかればかなりの収穫だ。一旦帰ろうか。長居は危険だし」

美佳はこくとうなずいた。
戻っているときに誰か来ないか心配だったけど
やっぱり人は一人としてこない。

資料室に戻ってみても、誰もいないので安心した。
（現在の時刻：西暦２１３７年５月２０日午後１時１２分）
「１時１２分か。今日の調べ物はこれくらいにする？ここらじゃなにもわかりそうにないし」

図書館は暗い。日光は全部遮断され、最低限の明るさしかない。
霧也は今日は遊びたかった。敵を討つ日は遠くない。
戦いの前というのはどうしても遊びたくなるものだ。

「うん。じゃぁさ、遊んじゃう？」
さすが美佳だな。わかってる。と感心しつつ元気いっぱいにうなずいた。

まずどこに行くかと霧也はたずねたが美佳はこういうのは行きあたりばったりがいいんじゃない。と行き先を決めずに霧也の手をとって歩き出した。
街はやっぱり明るい。昼になっても今日は日差しがやわらかかった。

穏やかな日に霧也と美佳は包まれている。
≪いつまでこんな平和が続くのだろう。壊したくない。でも…≫
≪霧也にうそはつきたくないのに・・・こんな楽しそうなこの子見たら…私…≫

二人は穏やかなまちをひたすら歩いた。
たわいもない会話を交えてひたすらに歩いて、クレープやらなんやらを食べて
遊びというより散歩をしている感じなのだが今の二人にとってはそれでもすごく楽しかった。

「ねぇ、ゲーセン行こうよっ！」
美佳は満開の笑顔でそう提案した。
霧也も負けず満開の笑顔でうんとうなずいた。

ゲーセンは最近人気がなくなり、休日でも美佳と霧也だけだった。
これが二人にとってはすごくありがたいもので二人はいろんなゲームを遊びつくした。

プリクラと呼ばれる人工美白写真製造機で写真シールを撮って、
エアーホッケーと呼ばれるもので能力のぶつけ合いをした。
この勝負には美佳が勝ち、また二人の対戦歴は引き分け。

「あたしの勝ちぃっ♪これでまた引き分けね」
「くそぅ・・次の勝負はまけないからな」

≪いつまでこうやって美佳とこんなたわいもない勝負ができるのだろうか≫
≪いつまで霧也とこうして楽しく勝負できるのかな≫
「あれ？霧也って勝負に乗り気じゃなかったんじゃ…？」

「そうだっけか？…あぁー。こういう勝負はいいんだよ。ほんとうに能力ぶつけあってまるでけんかみたいな…あぁいう勝負には乗り気じゃなかったけどな」
そう、下手したら美佳をけがさせてしまうあの勝負はあまり好きではなかった。

美佳にはけがしてほしくない。美佳をなぐるのもいやだ。
霧也はそう願いながらあの勝負をしていた。

「そうなんだぁ。んーでも、あのさ霧也。ひとつお願い…いい？」
美佳からお願いがあるとは何事だと霧也は思って思わずＯＫしてしまった。
時刻は午後７時。あれからずいぶん遊んだものだ。

ゲーセンからここ、学校の闘技場にやってきた。

ここは観客席があり、中心にはだだっぴろい戦闘場所がある。
学校の行事などで使われる。

ここに二人で忍び込んで勝負の決着をつけたい。というのだ。
「ほんとにやるのか？」
霧也は準備しながらもそう問いかけた。

美佳はもちろん。と答えた。
霧也は今日だけはいやじゃなかった。きっと研究施設に殴りこみをかければ
騎士としての力をださなければいけない状況になるだろう。
そうしたらここから追放、もしくはつかまって死刑。

これが最後の勝負。
「じゃ、始めるわよ」
（騎士霧也戦闘起動：脳内回路を秒速１０ｋｍに固定。思考を運動・攻撃・防御に固定。すべての運動制御を解除。運動速度分速１００００ｍに固定。）
「行くよ」

美佳めがけてつっこんだ。
美佳にはとても見えないスピード。

そして美佳はよけようとしない。

目をつぶり、集中している。
霧也は美佳を軽く殴ろうとした。だが、どういうことか美佳に防がれた。
そして、手をつかまれた。

「何回も戦ってたら見えなくても感覚でわかるものなのよ」
美佳の手には電気が帯びている。
人の体は電気を通す性質がある。

霧也はやばいとおもった。
（攻撃感知。警告：電撃が脳に到達。麻痺を引き起こす恐れがあります。）
霧也は電撃をもろにくらった。

霧也は美佳の手を振りほどき、離れた。
戦いの基本はヒットアンドアウェイ
攻撃、離れて、防御。

その繰り返しが基本だ。
「こんどはこっちからいくわよっ」
美佳は体をさすり、静電気を起こし、増幅させ
胸の前で圧縮。圧縮粒子砲のようりょうを利用している。

霧也はとっさに宙に魔法陣をかき、結界をつくる。

そして数秒後。圧縮された電撃がうち放たれた。
結界をはっていなければ１００％死んでいた。
どこか殺気さえ帯びているこの電撃は
おそらく美佳の本気なのだろう。

美佳は本気のようだ。何をそうさせたのか祐輝にはわからなかった。
≪これで、最後。あたしと霧也がこうして一緒にいれるのは最後。
だから、本気で戦う。明日、霧也は研究施設に殴りこむだろうから
…いいや、絶対殴りこむ。この子なら…≫

≪美佳といられるのはこれで最後。おれも本気をだすか。明日殴り
こむ。そしておれはここにはもういられなくなる…≫
「おれも本気をだすよ。」

（意識エネルギー放出。）
霧也の体には真っ黒な意識エネルギーが流れ始めた。
霧也は自分が騎士であることがばれないか心配だったが美佳にそれ
に気付いたようすはない。剣を出せば、さすがにばれるだろうから
剣はださない。

「意識術。炎弾！」
霧也は手に意識エネルギーを集め、頭で炎をイメージし、炎に変換。
そしてその運動速度を分速１０００ｍに設定。

打ち出す。１個、２個とどんどん炎弾の数は増えていく。
炎弾は次々に美佳めがけてやってくる。それを美佳は斜め横前に跳

躍してかわす。

雷では炎を沈下することはできない。炎を消すのは水。
しかし美佳には水を操る能力はない。彼女が操るのは静電気だけ。
「はぁ…はぁ…意識エネルギーはやっぱり久々に使うと神経と精神にくるな…」

霧也はさすがに息をあらくしている。
意識エネルギーは精神そのもの。頭で考えているものに姿を変え、使いすぎるとせいしんがやられてしまう。それで心を亡くしたという話もよくあった。

「霧也、あんたやっぱり強い。でも、今のあたしなら…負ける気がしないっ！」
美佳は炎弾の間をくぐり、急接近してきた。
そして、懐にもぐりこまれた。

（攻撃感知。種類：打撃。防御をおすすめします。）
美佳の殴りを霧也はうけとめ、なぐりかえす。
美佳もそれをうけとめる。その繰り返しが数分続いた。
「美佳ぁっ！！」
「霧也っ！！」

二人はほぼ同時にこぶしをふりあげた。
だが、霧也の攻撃ははずれ、美佳の攻撃があたった。
美佳の勝ち。

霧也と美佳はがくりと膝をついた。
そして寝転がり、大声で笑った。声高らかに笑った。
二人一緒の最後の時間。

二人はやっぱり笑っていた。
その勝負の後、霧也は寝てしまったので美佳は
霧也を自分の家のベッドに寝かせた。

おやすみなさい。そうつぶやくと、おもむろに外にむかった。
「さようなら。次会うときは・・・・」

どこか虚ろな目で
夜空に浮かぶ満月を見ていた。

？　ー明日へ向かう旅路ー　？章ー調査：一時の安息ー（後書き）

おはこんばんにちはぁーっ！
読んでくれてるかなぁ～
読んでくれてる人Ｇｒａｚｉｅ！！
コメントくれた人さらにＧｒａｚｉｅ！！
すべての人にＧｒａｚｉｅ！
ってうるさいって？すいませんね
Ｇｒａｚｉｅって何語か知ってます？イタリア語ですよ
なめすぎですか？すいません笑

え、もっと小説本編に関係する話書けって？
んーいいすぎるとネタばれになりかねないんで
やめときます。ここはトークコーナーで笑

この話書いたころはいつでしょうね
中１ですかねたぶん２年前です
果てしなくそのころは小説かくのさぼってましてね
全然だったんですよ、だって
数年書いてるのにまだ？なんですから
結構長い作品にするつもりなので

応援よろしくおねがいします！

最後にＧｒａｚｉｅ！↑またかょ

？　ー明日へ向かう旅路ー　？章ーアクアの休日ー（前書き）

はいっ
えーと霧也の相棒の話ですよ
では、どうぞ

？　ー明日へ向かう旅路ー　？章ーアクアの休日ー

――――４章　アクアの休息――――――

「おまたせしましたぁっ」
アクアは九條との約束に遅れずきた。
そして、九條はそれよりも早く来ていた。

やわらかい日差しが包むカフェ。ちょっと大人の雰囲気のあるカフェテラスだ。
「やぁ、どうも。昨日はぐっすり寝れましたか？」
「あっえーと。ちょっとうきうきして２時間くらい寝れなかったです」
それを聞いて九條はくすっと笑った

アクアは顔を真っ赤にする。
まるで恋人同士のような光景だ。
「あの、アクアさん。アクアって珍しい名前ですね」
珍しい。たしかに普通の人間にしたら珍しい名前だ。

意識界に存在する人は、人間道にもいる。
意識界の人は人間の心そのものだから。だけどアクアはここで生まれた。
武器として。名前は能力でつけられた。水をあやつるからアクア。
「まぁ、そうですねぇ私はぁ武器ですから。こういう名前なんですよ」
「なるほど。最近武器ってあんまり見ないですね。」
そう。第三次世界大戦でたくさんの武器と騎士が命を落としていっ

たのだ。
だから今となっては武器は意識界でもなかなか見つけることができない。

おそらくこの青年にしても珍しいのだろう。
いろいろ質問をしてきたので、アクアは答えれる範囲まで答えた。
さすがに誰の武器かまでは答えなかった。

嫌われたくなかったから。あの有名な殺戮者。魔剣士と恐れられた人の武器としったら
きっとこの人は自分のことを嫌うだろう。軽蔑するだろうとおもったのだ。
アクアと九條は紅茶を飲みながらたわいもない会話をしている。

もう質問攻めは終わり、普通の世間話。笑える話などをしている。
あたりはすこし強めの日差しが差し込み、木々は風にそよめいている。
こんなやわらかな時間がいつまでも続くといいなとアクアは思った。
だけど楽しい時間はすぐ過ぎていくものだ。

時刻は午後３時３０．ここらへんで二人は解散することにした。
「楽しかったぁ♪九條さんやっぱりいい人だなぁ～」
家で余韻に浸っているアクアに現実に呼び戻すようなメールが届いた。

（明日。地下の研究施設に殴りこみをかける。殴りこみの用件は人工能力者計画の中止を要求。研究の詳細はここに記載しておく研究は…）

いきなりの殴りこみ宣言メール。

アクアは気分が台無しだった。そりゃぁ霧也がいくとこにはどこまでもついていく
それは変わらないのだが、タイミングが悪かったのだ。

「もう、きりやぁぁぁぁ！何でこんな時に殴りこみ何だよぉ～…はぁ…」
まぁ、これも騎士剣としての運命か。とアクアはあきらめた。
「で、なになに～研究の詳細はぁ…」

アクアは驚愕した。人間を作る。
これしか明らかにはなっていないが、それだけでも衝撃的な事実だ。
人は神により作られし神聖な創造物。

それを人の手でつくるというのは神の冒涜。すなわち世界への宣戦布告。といったところだろうか。もっとも科学が発達している今となっては
神論は衰退し、今となっては騎士やその下にある国にしか信仰されていないものだ。

もちろん科学の街の学園都市兵庫には神論なんて非科学的なものなどない。
なんとしてもとめないと。
アクアにスイッチが入った。

≪時刻は午後４時。よし、まだ間に合う。殴りこみまでできるだけ多くの情報を…人間道でできないことがここではできるんだからぁ。

みてなさい、意識ネットワークにはうそはないんだからぁっ≫

意識ネットワーク。人々の意識がめぐるネットワークだ
それは人が今考えていることが、書かれている掲示板のようなもの。
人の心を垣間見るようであんまり使いたくなかったこのネットワーク。
武器にしか使えない。武器の特権である。

（意識ネットワークにログイン。キーワード入力。完了。人工能力者計画についての意識を探します。……検索結果。１００人の意識が見つかりました。）
≪よし。みつかった。かたっぱしから開けていくよぉっ≫
アクアは目をとじ。脳内に浮かぶ意識に集中した。

１人、また１人とアクアは次々に意識を見ていく。
その中に３４人目。気になる名前があった。
≪古園…美佳…≫

あの霧也に何度も勝負をかけている霧也のたった一人の友達。
その名前がなんで・・・？
と思い、一瞬アクアは考えた。

≪そうか。霧也の名前もあったし、これはこの言葉を知っている人の意識なんだ。そう、それなら…たぶんこの子は霧也と一緒に調べてたんだね≫
と納得。

彼女の意識を見ないまま、次に行った。
時計の音しかしない静かな空間。

あたりはまだ薄明るい。
ひとつ。二つ。開けて、見て。
それの繰り返し。

そして１００個目の人物名を見ようとしたとき。
エラーメッセージが表示された。
（エラー：なにものかにより妨害されました。強制終了いたします。）
「くそぉっあとひとつだったのに。でも、これでだいぶ情報は得たね。これで霧也も喜ぶよね。」

≪でも、この研究の最終目的と首謀者はわからなかったなぁ。わかったのは何体検体を作るかとか、そんなことだけ。かなり重複してたし、下っ端には情報はあまり漏らさないってことかなぁ≫
アクアは伸びをしながら情報の整理をした。

途中で意味不明な暗号みたいなのが出てきたのだが
それはアクアの能力では解明できない。
霧也でないとわからないのだが霧也にリンクすることはここからじゃ不可能。
考えててもしかたないか。と

アクアはため息をついた。
その日は明日に備えて寝ることにした。

明日は、たくさんの血が流れるだろう。
それは霧也も覚悟の上なのだろうか

また人を斬らなければいけないのだろうか。
なんだか急に怖くなった

？　ー明日へ向かう旅路ー　？章ーアクアの休日ー（後書き）

今回は前と比べて短いです
ワードのようし3枚分くらいですかね

でも他の人が書いてるやつに比べると
長いです笑
今いろんな人の小説見て回ってるんですけど
参考になりますね
コメントつけてまわりますよ
参考にさせてもらいます

Ｇｒａｚｉｅ

？　ー明日へ向かう旅路ー　？章　ー血の雨ー（前書き）

はいっ！来ました
事件はもう佳境を迎えてます
かといってまだまだ小説は続きますよ？笑

？　ー明日へ向かう旅路ー　？章　ー血の雨ー

――5章　血の雨――

朝。今日は一段と日差しが柔らかい。
決戦日というのになぜこんな柔らかくあたたかいのだろう。
「ふぁ～。おはよう。ってここは…美佳の部屋か。でも、いないのかな。美佳はまぁ、今日はその方が都合がいいかも。あんまり危険なことさせたくないし…」

霧也は大きな欠伸をし、起きて着替えをすませた。
突入時刻は午後6時から。
まず学校のみんなが家に帰っているだろう時間、図書館の閉館時間前ギリギリの時間。

そして今日は学校がないのが幸いだった。
学校があっては自分も学生だから授業を受けなくてはいけない。
すると少し予定に誤差が生じる。

6時まではフリー。だがそのあとからの予定がきつきつなのだ。
「ふー。突入までは今日は街をぶらぶらするかな」
霧也は突入に必要なものとお金だけを持って家をでた。

外に出るとあたたかい。自然とやさしい気持ちになってくる。
突入するまではやさしい気持ちでいたかった。戦えばまた多くの血がながれる。

必然的に誰かを殺すことになる。心を鬼にして斬らなければいけない。
だからせめてその前くらいはやさしくありたいと思うのだ。
「見慣れた街でも改めて見てみるとだいぶ違うんだなー」
普段は意識して見ることはないからいつもたっているこのコンクリートの地面も
このビル。学校。すべてが新鮮に感じた。
しばらく歩くと知り合いに会って、あいさつを交わしたり
そんな何気ないことなのに涙が出そうになった。
いつも美佳と行ったクレープ屋に行ってクレープ食べて
昨日のゲーセンを通って…
≪突撃したらおれは死刑か、町をでるかのどっちかだからな…≫
町をぶらぶらと歩いているうちに時間になった。
図書館の地下に入り、アクアを剣化した。
あたりは暗いが、昨日来たので道はわかる。
それに敵がきても認知システムでわかる。
「いくぞ。アクア」
「うん。」
（騎士霧也戦闘起動。脳内回路を秒速１０ｋｍに固定。運動制御解除。運動速度秒速３ｋｍに固定。思考を移動・攻撃・回避に設定）
霧也は前方に跳躍した。
（敵感知。攻撃）

霧也は出てくる検体を次々に斬り倒していく。
むせかえるような血のにおい。
霧也にはたっぷり返り血がついていた。
≪お願い！やめて！攻撃しないでっもうだれも斬りたくないのに！！≫
強く願っても検体は次々に現れ、攻撃を仕掛けてくる。
斬る。斬る。斬る。今まで何人の人を斬ってきたのだろうか。
神は自分を許してくれるのだろうか。と考えて、やめた。
数秒進むと広場にでた。真っ先に研究所に向かう。
すると一人の男が検体と戦っているのが見えた。
市谷だ。
「市谷！お前研究に加担してたんじゃ・・・」
「何を言っている。今の状況みりゃわかるだろう。おれは止めにきたんだ。この研究を。お前と同じだな。」
そう市谷は検体と戦っている。
首謀者のはずがない。
だとしたら首謀者は誰だと霧也は考えた。
「首謀者が誰か知りたいか？」
霧也はうんとうなずいた。
市谷は戦いながら話す。それを霧也も戦いながら聞く
「首謀者は・・・お前のよく知る人物。そう、古園　美佳だ。」
霧也は一瞬動きが止まった。
≪美佳が…？なはずはない…だって…だって…っ！≫

そんな霧也をよそに市谷は話を続ける。
どうやら霧也の周囲を観察していたら美佳がこの研究所に入っていき、
研究員とあいさつを交わすのを見たようだ。

「これが真実だ。気になるなら、先に行って確かめることだな。こいつらの足どめくらいはしといてやるよ」
霧也はこくとうなずき、再び前に跳んだ。
≪美佳、ほんとなのか？うそだよな？うそって言ってくれ。美佳…っ！≫
再び検体が待ち構えていた。

かたっぱしから、斬り倒し進み、斬り倒しては進み・・・
この繰り返し。過ちは何度繰り返すのだろうと霧也は思った。
やめたくても、体が斬ることをやめない。本能がそうさしているのだろうか。
壁に、床に天井に、そして自分に血が飛び散り、付着する。
気分が悪くなる非日常だ。

数秒進むと霧也はひろいつきあたりにでた。
そこには、あの人が立っていた。
「やっぱり来たわね。」

美佳だ。
「美佳、なんで…そ、そうだ。止めにきたんだよな？そうだよな…？」

美佳は何もいわず、霧也に電撃を撃とうとする。
「そんな…お前が…」

「そう、あたしが首謀者よ。研究を止めたいならあたしと戦いなさい。」
美佳は手の先に意識を集中させ、電磁砲を撃つ準備をしている。
「やだ。戦わない。お前とは戦わない！」
霧也はアクアを床におき、手をひろげ前を向いてたった。
「あんたが戦わなくても…あたしは…あたしは戦うわよっ！？」
美佳はそんな霧也に容赦なく電磁砲を撃った。
前戦った時よりも威力は高い。

だけど霧也はさっきの体制から全然動こうとしない。
（攻撃感知。電撃。脳に到達。エラー。修復します。修復完了予定時間４時間後）
「なんで戦わないのよっ！死ぬわよっ！？戦いなさいよっ！なんで…なんで！
あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

美佳はまた電磁砲を撃ちだす。２，３発霧也はうけた。
普通なら死んでいるが、騎士はこんなことじゃ死なない。
「お前がこんなことするのにはわけがあるんだろう？…仕方なくこうしたんだろう…？
だったら、おれにいってくれよ。なにがあったの…？」
「うるさいうるさいっ！…うるさいっ！　あたしはただの悪党。そ

れだけよっ！　それだけなんだからぁっ！」

美佳はまわりの物質からあるだけの静電気を集め、増幅。
今までにないほどの電磁砲を作ろうとしている。
胸の前で、圧縮。発射。
だが、霧也はよけない。ふせがない。

美佳がなにかの痛みを背負っているのなら、霧也もその痛みを一緒に背負うつもりだから。
電磁砲は霧也に襲いかかる。
ほとばしる電気。
床にも壁にも電気がつたう。

霧也は床に突っ伏していた。死んだだろう。美佳はそう悟った。
「なんで…こうなっちゃったのかな…好きなのに…なんで…」
…
……
……
……
「…み…か…」

静寂

美佳は驚いた。霧也の声がする。
美佳はすぐさま霧也の元に駆け寄った。
「お前…今…好きって…」

「バカっ！今はそんなことどうだっていいじゃない。とにかく治療を…」
美佳は泣きながら顔を真っ赤にして叫んだ。
アクアは人の姿に戻り傷をふさぎ、心臓を正常に戻している。
「おれもさ…好き…なんだよ…だから…さ、おしえて？なにがあったの…？」
美佳は何があったのかを語り始めた。

？？？？？？？
西暦２１２７年５月１５日
第３次世界大戦まっただ中。
「美佳、あんたは逃げなさい。あなたのその能力があれば大丈夫。そこのお兄さんと一緒に逃げるの。わかった？」
「お母さんは？逃げないの？」
小さい少女。美佳は全身黒い服に身を包んだ男の腕に抱かれ、母親に問うた。
「お母さんは戦うわ。さ、逃げなさい。じゃぁお願いしますね」
男はこくっとうなずき、ものすごい勢いでその場を後にした。
そして兵庫に逃げ込み、美佳の命は助かった。
のちにその男に母親は騎士に殺されたと告げられた。

そして中学生になったころ、ある女からさそいがあった
「あなた、騎士が憎くない？いい復讐の仕方思いついたんだけど・・・」
美佳はその誘いに乗ってしまった。
その計画の名前は

？？？？？？？

「人工能力者計画。今話したのがあたしがその計画に加担した理由よ」
「そんなことがあったのか・・」

霧也はもうすっかり喋れるまでに回復した。
だが、まだあまり動けない。
「おれに、お前を責めることはできないな。おれがその立場ならきっと美佳と同じことをしてた。誘いにのっていたから。それは当然のことなんだと思う。だから、お前は悪くない。…悪くない。」

霧也は美佳の頭を弱くなでる。
美佳は泣いていた。声をふるわしないていた。
「な、帰ろ？」

美佳はうんとうなずき。
霧也に肩を貸し、歩きはじめた。

どうやらここには上につながるエレベータがあるらしい。

それは美佳の部屋につながっていて
霧也は美佳のベッドに寝かされた
その晩はみんなすやすやと幸せそうに眠っていた。
あんな事件などなかったかのように。。。

？　ー明日へ向かう旅路ー　？章　ー血の雨ー（後書き）

ちょっと荒いですね
せかされながら書いたとはいえ荒いです
まだまだ修行積まなきゃなりませんね
次で終章です。
かといって話はまだまだ続きますよ？笑

？が終章なだけで

2部、3部・・・と続きますからね？

？　ー明日へ向かう旅路ー　終章　ー明日へ向かう大きな一歩ー（前書き）

？はこれで終わりですっ！
さぁー短いですよー笑

？　ー明日へ向かう旅路ー　終章　ー明日へ向かう大きな一歩ー

―終章　明日へ向かう大きな一歩―

朝。柔らかな日差しに包まれて美佳は起きた。
霧也は…いない。
「え！？いない…？もしかして…」
と美佳は思考をめぐらせた。

霧也は騎士であった。ここは超能力者の街。
もうこの街にはいられないということなのだろう。
だとしたら門にいるはず…

そう思い美佳は家を飛び出していった。
「ふー…アクアぁー…この街ともお別れだなぁ。とりあえず必要なお金だけもって来たけど…なんか少しさびしいものがあるな。まぁ、覚悟はしていたけどさ。」
霧也はため息をつきながら歩く。

覚悟をしていたこととは言え、あの一件で自分が騎士であることがばれてしまった。
警察が言うにはこの街を出ていけば命は助かるらしい。

そして、あの研究の廃止も約束してくれた。
「さ…行くか」
「ちょっと待ちなさぁーーっい！」

美佳が飛びついてくる。
「うぉっ…！？」
霧也は少しうろたえる。
「あたし…あたしも…行くんだからぁっ！」

美佳は霧也の頭を弱く叩きながら言う
「行くって言ってもさぁ、お前は出ていく必要ないだろ」
「いやーそれがねーあたしも追放だってさぁ…例の研究だよ～」
と極力明るく言う。

霧也は納得したようすだ。
「あー行く前にさ、少しやりたいことあるんだけど…」
霧也はそう言って、美佳とアクアと3人手をつないで
円になって誓いを行った。
≪…ほら、昔大戦中にやった…≫
≪あれね…いいんじゃない？≫

「どうか、我らのゆく道に多くの光と希望があらんことを。」

？完

？　ー明日へ向かう旅路ー　終章　ー明日へ向かう大きな一歩ー（後書き）

短いっすね
終章とは昔から短いものです。
まだまだ物語は続きます！
次は？ですっ！

ここまで書いといて気づいたことなんですけど
突入シーンが短いんですね
まぁ、事件メインな小説じゃないんでいいんですけど・・・
もうちょっと長くしたらよかったですね

ブログのほうでは感動した
まさか美佳が首謀者だとは思わなかった
と感想をいただきました。
すごいうれしかったですっ！

1人でも多くの人が読んでくれていることを願っています！
さて、ここから更新ペースが落ちますよ
？の最初らへんまでしか書いてないんです

2週間に1回くらいは更新したいですね
むずいか笑
受験生ですしね

月？くらいですかね

?　ー旅人の唄ー　?章ーイタリア人の旅人ー（前書き）

はいっ　2部がやってきましたよ

？　ー旅人の唄ー　？章ーイタリア人の旅人ー

西暦２１３８年　６月　１０日　同調都市東京。
兵庫での人工能力者計画から１年と約１カ月後
霧也と美佳達は東京の安いアパートメントを借りて住み始めた。
そのアパートはまるでごみ屋敷でもありそうな出で立ちだった。

そして生活をするということは必然的に
金を稼がなきゃならんということで政府直属の便利屋を営み始めた。

「えっ！仕事ですか！？」
霧也は驚いた。便利屋を初めて１年たつが仕事がいままでひとつも
来なかった。
なのに急に今仕事の依頼が入った。

「はいっ！喜んでお請けいたしますっ！…では、さっそく内容の
確認に移ってもかまわないでしょうか？」
霧也は目の前の男に問いかけた。
男は口早々と説明した。
どうやらイタリア人の保護らしい。

その人は雪山で遭難しているそうだ。なかなか普通の人じゃ立ち入
れない危険な場所なので騎士と能力者にお願いしたかったそうだ。
霧也は今いた建物を出て行き、一旦家に戻ることにした。

今の時刻は朝８時。まだ日はやわらかい。
６月とは思えないほどの快晴だ。
東京の街を歩いていると教会や研究所。国会議事堂に総理官邸等が目に入る。

政治、宗教、科学が見事な調和を満たしている唯一の街。
東京の街にも、自然はほぼない。
そんな街をぼけーっと見ながら歩いているうちに家についた。

大声で叫んで美佳を驚かせるドッキリをしようかなとかそういうことを考えながら
ドアノブをひねった。
「たっだいまぁーっ！！美佳っ！仕事入ったよーっ！」

家の奥から足音が近づいてきている。
「まじでっ！やったじゃんっ！で、内容はぁっ？」

霧也は家の中に入り、仕事に必要なものをポケットに入れながら仕事内容を
美佳に伝えた。すると美佳は立ち上がり、早く行こうと張り切って家を飛び出て行った。

「ちょっ！待てって！」
霧也はあわてて追いかけた。
美佳はちゃんと待ってくれていた。

はりきりすぎだよと霧也は美佳の肩をたたいた。
「じゃぁ…行くか！」

場所は雪山。しかも遭難してるというんで
ヘリコプター使用の許可がおりた。二人は早速用意されたヘリコプターに乗り込み
雪山に向かうことにした。その雪山の場所というのがこの東京からさほど離れていないところで、もともとは平地だったそうだが

大3次世界大戦での神々の粛清とよばれる事件によって天変地異が起こり雪山と化したそうだ。
「どんな人だろうね保護の対象のイタリア人。日本語通じるのかなぁ」
「大丈夫だよ美佳、日本語は30年ほど前から英語に代わる国際語に認定されてるから通じると思う」
ヘリコプターの外は一面真っ白だった。

6月のこの時期でもここは雪でうめつくされている。
天変地異の影響だろうか。
「あ！見て霧也！人が倒れているわよっ」

「たぶん保護の対象だろうね。よし、おりるか」
ヘリコプターを止め、ブーツをはいて雪山に降り立った。
倒れているという人は男一人女一人

外見年齢はじぶんらよりは上という感じだった。
「あの、すいません大丈夫ですか！？」
霧也と美佳は二人の体をさすってみた。
「ん…んあぁ…ってて…あぁ…腹減ったぜよぉー…」

「うぉっ！起きたっ！」
美佳が飛んで驚く
「土佐弁…？　まぁいいや。依頼を受けてあなたがたを保護しにきました。どうぞ、ヘリにお乗りください。」
（土佐弁って…何年も前に絶滅したと思ってたのにっ）

「ありがとうー　あぁー助かったぜよぉー」
「おおきにっ！助かりましたわぁー」
土佐弁の男性イタリア人と京都弁の女性イタリア人をヘリに乗せ、東京に向けて飛び出した。

「あぁ…食べ物はそこにありますから好きに食べてくださいね。」
霧也は食糧袋を指差して告げた。

すると土佐弁と京都弁はパンやらおにぎりやらをむさぼりはじめた。
「あぁーそうだぁっ！　これからお世話になるんやき、お互い自己紹介でもするかのぅ」
「へ？お世話になる？」

そこまでは聞いていないぞ。
保護するというのは、助け出し依頼主のもとまで送り届ける。
の保護だと思っていた。

だけどこの土佐弁が言うには御世話になる。
ってことは、居候…？
「んーえーとーおれは騎士で便利屋の朱雀　霧也で、こっちが能力者、そして俺の彼女の古園　美佳」

「おれはカッミノ・ビジャトレ。能力者ぜよ。そんでこっちのねえやんがぁーコッロ・ビジャトレ。姉弟で旅をしちゅうもんぜよー。」
土佐弁…じゃなくてカッミノが言うには

二人は能力者でイタリア出身。姉弟で旅をしていて
日本が好きでまず東京に行こうとしてたが途中で遭難したそうだ。
「それで、お世話になるってあたしたちの家に居候するってことです…か？」

「そうやぁ？うちらそういう風に依頼申請したんやけど、きいておりまへんでした？」
霧也は思わず頭を抱えた。
二人だけでも大変なのにそのうえもう2人。

一時期だけとはいえこんな家計がぎりぎりな時に

２人も増えるとなるとものすごく大変だ。
「聞いてませんでしたよ。んー。まぁ、いいです。よろしくおねがいしますね」

霧也と美佳はぺこりと頭を下げた。
あの二人もよろしくと言いながらおにぎりをほおばっている
そうこうしているうちにヘリは東京の離着陸所についた。

「つきましたよ。では先に家に向かっといてください。おれはまだやることあるんで」
美佳に案内をたのみ霧也は走っていった。
現在の時刻は午前１０時

結構時間がたったものだ。
霧也は先ほどの建物に行き、さっきの男に仕事の完了を告げ

報酬を受け取った。
ここまでで仕事は終了。
仕事は報酬を受け取るまでだとだれかさんに教わった。

先生が遠足は家に帰るまでと昔言ったように仕事もおなじ。
「さてと、家に帰らなきゃな。あの二人にいろいろ聞きたいことあるし」
そう、彼らは旅人。

世界のことを知りたい霧也にとって旅人と出会えたのは幸運である
はずだ。
そしてイタリアから来たとなると霧也にとっては好都合
霧也と美佳は能力者も騎士も、科学と宗教。すべての国、文化が手
を取り合って
いい世界を作っていける世界にしたいと思っている。

そしてイタリアは騎士の国。
日本は科学の国。能力者の国だ。
だからイタリア人と仲良くするということは今後の役に立つ
とふんでいたのだが・・・

「ただいまぁ」
霧也はドアを開けた。
そしてリビングに入るなりカッミノが寝転びながらテレビをみると
いう…

ものすごいくつろぎ様。
ふつう居候し始めて最初は礼儀よくしているものだろう

そしてだんだん慣れてきてくつろぐようになる。
というのが普通だと霧也は思った。
だけど目の前の似非土佐弁イタリア人カッミノは
初日、しかも数十分しかたっていないのにもうくつろぎだしている。

「はぁ…あの、カッミノさんお姉さんはどこにいるんですか？」
「あぁ、姉やんならぁー美佳ちゃんと二人でどっか出掛けにいったぜよ」
出掛けた？　まぁ美佳と一緒なら大丈夫だろう。

迷うことはないだろうし、誰かに絡まれても大丈夫だ。
「あの、ちょっと聞きたいんですがたびの目的とかってあるんですか？」

「あぁ、あるぜよ。目的は…」
カッミノは旅している目的を雑談まじりに話し出した。

まとめると、まず一つ世界を見て回りたいと思った
そして旅先で能力者が騎士に居場所を追われているのを見て
騎士も能力者も差別のなく平らな世界にしたい。と思って日本に来たそうだ。

まぁ日本が好きってのが大きいみたいだが。
「そうなんですか、実はおれ達もあなたがたと同じ目的です」
霧也は自分たちの事情も語りだした。

カッミノもうなずきながら語っている。
すっかり意気投合したようすで霧也の敬語も薄れていった。
そしてそのまましばらく時が過ぎた。

時刻は午後１３時。
美佳達が帰ってきて一緒にご飯を食べた。
ご飯は美佳とコッロが作ってくれたカルボナーラとおにぎりだった。

カッミノはいい加減だが姉のほうは以外としっかりしていた。
話しているとだいたいの人の性格というものはわかるものだ
みんなでこの組み合わせこそ日本とイタリアの同調だねと笑いながら食べる

ご飯はおいしかった。霧也は家族が出来たみたいでなんかうれしかった
カッミノは食べながら自分が旅をするきっかけを語ってくれた。

†††††††††††††
時はさかのぼり西暦２１３３年４月４日イタリア
「父さん？」
カッミノは目の前のものすごく恐ろしい形相をした父親に驚いた。

彼が言うには騎士を一人殺してしまったらしい。
騎士は避けに酔っていて能力者である父親に暴力をふるい

金を取ろうとしたらしい、そのお金はカツミノの進学費用だったようで

どうしても守りたかったらしく勢い余り殺してしまったというそうだ。

「わしは人一人殺してしまった。その罪滅ぼしにわしも自ら命を絶つ！」

「だめだっ！死んだからって罪が消えるわけじゃないっ自殺などしょうもないこと考えるもんじゃありませんっ」

カツミノは父親に向かって叫ぶ

父親はナイフを自分の腹に突き立てている。

カツミノはそのナイフをけりおとそうとした。

「邪魔をするなっ！」

父親はカツミノをひっぱたいた。

父親の顔にはマインドコントロールという文字が小さく浮かび上がっている

「マインド・・コントロール・・」

「邪魔をするのなら、お前を殺す！」

ついには声まで変わり、完璧にあやつられた状態になった。

眼の色もすべて変ってしまった。

父親は能力を使って攻撃をしかけてきたから

カッミノも能力を使わざるを得なかった。
「完璧に操られてる…とめ…なきゃ…な」
カッミノは机に置いていた鉛筆を投げた。

彼の能力はベクトル変化らしい
あらゆるもののベクトルを自由自在に操る能力。
投げられた鉛筆の運動量を操り、
運動量秒速１０ｋｍ.

さすがに騎士の運動速度にはかなわないが、十分な速さだ。
彼の父親は一瞬の動きでナイフでそれをはらい
ナイフをもう一本取り出してナイフ同士をかちんとならす

すると音はするどい刃にかわりカッミノに飛んでくる
そう彼の父親は音を物質化する能力。
ものすごく非科学的な能力なのだが、超能力は時に科学を超越するのだ
カッミノは自分の運動速度を操り瞬時に跳躍。

音の刃を次々とかわし、父親の懐にもぐりこむ。
そして、自分の腕のベクトルを操作し、父親を殴り飛ばした。
これくらいしないとマインドコントロールはとけないだろうと踏んでいたのだ。

ねらいどおりマインドコントロールは解けたが、父親は殴られた衝撃で死んでいた。
ちょっと加減を誤ったのだ。
やはりまだ十四歳の子供。あまり精密な力のコントロールはできなかった。

そこに、姉が帰ってきた。
姉は目の前の状況に困惑し、取り乱した
彼は状況を説明し、座り込んでしまった。

「おれは、父さんを殺した。殺…した人を…肉親を…殺…した…
ははっ…ははは…」
カッミノと姉は治安部隊により逮捕され、3年間牢獄の中に閉じ込められた。
父親の罪もかぶったのだ。本当ならば死罪なんだが、まだ子供だということで
懲役だけで済んだのだ。

そして二人は牢獄の中で考えた。
騎士も能力者も一般人もすべての人が笑って暮らせるような世界をつくりたい。
そのために世界を見て回ろうとそう二人は話し合い

牢獄から出たのち、荷物を早急にまとめイタリアを出て行った。
もともと騎士の町。能力者は使いまわされ捨てられるのが運命

イタリアを出たいというのはこの事件前にもあった。

そしてのちにこの事件は大きく報じられ、名前を能力者騎士殺害事件という有名な出来事となった。

††††††††††††††††††

「そうだったんだぁーそんなことがあったとわねー能力者騎士殺害事件…」

美佳は以外にもこの事件をしらなかった。

まぁ、４年前おれらが１０歳の時だから知らなくても無理はないかもしれない

ニュースを見ない人だったら当然しらないし

美佳はニュースなんて真面目な番組はほとんど見ないから、知らないのも必然なのかな

と霧也は思った

「結構有名な事件じゃないかぁ。そんなことがあったんですねーたいへんですね。んーでも、やっぱりおれ的には似非土佐弁と似非京都弁になった経由も聞きたいですね」

と霧也は笑い混じりに言ってのけた。

こういうくらい話のときはちょっとぼけて場を和ませるのが基本だと霧也の頭にはインプットされている。

「話そうか？おれが土佐弁になった理由」
とこれまたカツミノが笑い混じりにいってくる
霧也は、いやいいです長くなりそうなんで

と言ったら場の空気は狙い通り和んできた。
そしてそのまま平和な時が流れて行った。
まるでずっと一緒にいる家族のように

？　ー旅人の唄ー　？章ーイタリア人の旅人ー（後書き）

はいっ！
？部です！
荒いかもしれませんが、指摘してくれるとありがたいですね

これはいつごろかいた話だろう
中２の夏ですね
懐かしいです

この次の話は今執筆中という感じです
出来次第、読み返し、修正して
公開したいと思います

そういえばですね
今登場人物の絵を描いてるんですね

これが難しくてですね
主人公２人が難しいんですよ
祐輝と美佳が・・
がんばりますけどね＾＾

楽しんで作ったので、どうか楽しんでよんでもらえたらなと思います。
似非土佐弁と似非京都弁。
京都弁の姉のほうは口数も少ないですが重要な人物なので
忘れないでくださいね

？　ー旅人の唄ー　？章ー第３次大戦の記憶

―？章　第３次大戦の記録―

西暦２１３８年７月７日
場所：日本・福岡西部のとある町
「こんなとこにほんとにいるのかねーあいつが」

霧也はため息をついた。まわりは昼なのに日もあたらない
それどころか、７月なのに冬景色。ここも大戦の影響でこうなったのだろう。
「さぁね、でもいるんじゃない？それにしても寒いわねー。上着持ってったからいいけど、なかったら死んでたわね。あたしたち」

全員がほぼ同時にため息をついた。

そもそもこうなったのは
この日受けた依頼が原因だった

？？？？？
「あぁーあーまさか今回の仕事が調べ物とはね」
霧也はため息をついた。
そう今は仕事の最中、美佳と一緒に東京中央図書館に来ている
ここにはすべての資料、雑誌、小説等がそろっており政府の認識表

がないと
中には入れない。便利屋は政府が認めている職業なので政府にとりつげば
あっさりと中に入れてくれた。

「でも今回の仕事は調べ物とはいえやばいわよ？なにせ第３次世界大戦の記録をコピーして持ってきてくれだって」
「ここの資料は持ち出し厳禁、コピーも禁止されているからな。…んー。あと、騎士の能力使っても難しいな」
あたりには警備員が目を光らせている。
あやしい動きがあった場合即座に締め出され、最悪の場合はつかまる。

もちろん騎士の能力でコピーする場合、脳内の動きだから目にはとらえられない。
だが、警備員にはそれがわかるように人の脳内回路が見えるデバイスが支給されている
だから、こうやって見ているけれどコピーなどできない。

警備員を同時に気絶させ、同時に監視カメラも破壊すれば可能だがそんなことは自分たちには不可能だ。
「はぁ、やっかいな仕事をおしつけられたな。大戦のことなんておれら騎士でもあまりしらないのに。まぁ、大戦のとき大活躍した人たちなら別だけど…」
霧也は言うなり少し考えて

そうだ、その手があったと手を打ちひとりでうなずいている
「どうしたの？」
「市谷　宗だ。あいつは大戦を生き抜いているし、大戦の英雄と呼ばれている人だ。探せば何かわかるかもしれない」

市谷　宗。ずっと霧也が探していた人物。
だけどあの事件があってからはもうかたき討ちとかはどうでもよくなった。
復讐の結果があの事件なのだから。

「そうとなれば早速探そう。とりあえず一旦帰るか」
中央図書館をあとにし、家に帰った。

帰ると能天気な二人がいつものようにくつろいでいた。
今は午後2時。直射日光がベランダを強く照らす。
「よぉ、朱雀どうぜよ？仕事のほうは」

「収穫なし。だけど、気付いたことがある」
霧也は二人にさっき思いついたことを話した。
すると、探し物ならうちにおまかせとコッロが立った。

「うちの能力はマルチスキル。5種類の能力があるんや。そのうちのひとつ
物質探知。探し物の特徴をできる限り脳にインプットしたらすぐに居場所がわかるんよ」

と説明くさいセリフ。

霧也は特徴を次々にあげていった。
この能力は目標を一人に絞れない限り使えないらしいから
必ず市谷　宗のみをさすように特徴をのべていった。

「特徴感知。市谷　宗検索開始。人物検索。一人に絞れました。
X座高 y座高測定不能。国。日本。福岡西部。詳細は不明。」
早速市谷の居場所がわかった。
福岡西部のどこにいるかまではわからなかったらしい
「よし、早速福岡西部に行こう。」

？？？？
福岡西部は思ったより広く、そして民家が少ない。
1つか2つくらいあったかなというくらいだ。
本当にこんなところにあいつがいるのだろうかと霧也は内心不安だった。
だが、数キロ歩くと家が増えだし、霧也はしらみつぶしに

家をまわっていった。
だが、市谷の情報は得られず、また振り出しにもどった。
ひとまず民家であったまることにした。
「暖炉あったけぇー」
霧也達は暖炉に手を当て、冷えた体をあっためている。

「んーうちのサーチが外れることはないんやけどねぇ～」
「まぁ、たぶんこういう町にはいないんだろうよ。どっかの洞窟にいるとかー研究所にいるとか。そういうベターな感じは…ないか」
さすがにそれはないでしょと美佳が笑う。

まわりのみんなもそんなベターなことはないぜよーとか言っている。
「そうだよな、ないよな」
霧也も笑う。仕事中でも笑いが絶えないこの便利屋。

イタリア人二人が来てから本当に明るくなったものだ。
「じゃぁ、そろそろ行くか？」
「えー！まだあったまってようよーっ…ぶー」
美佳は頬を膨らませる。

他の2人も美佳ちゃんの意見に賛成ぜよーとか
うちもそうおもうんやけどなどと能天気なことばかり言っている
「まったく。気楽だなーおまえらは。早く探しに行かないとどっかちがう町いくかもしんないよ」
「そういう朱雀だってーさっきまで気楽ぅーにわらっとったぜよー」

「なっ…！ふー。あと5分な。」
3人が同時にわーいと喜ぶ。
まるで子供だ。まぁ、美佳に関してはまだ14歳。子供なのだが
あとの二人は大人。

結局４人は５分だけあったまって、再び探しに出た。
「寒いぃー。」
出て数分後美佳がいっせいを挙げた。

しかもそれが弱音。
霧也は弱音吐くなよと軽く言う。
「でもさー寒いもんは寒いの」

愚痴をぐちぐちいいながら、しばらく歩く。
しばらく歩くと洞窟があった。
「なぁ、まさかこの洞窟にいるとかないかな？」

そんなベターなとみんな笑ったが、一応入ってみることにした。
「ね、きりや。この洞窟って…鈴ちゃんのお墓のある場所じゃなかった？」
アクアが言う。
霧也は唖然とする、頭をかきながらそうだっけかと笑ってみる。

記憶にない。鈴のお墓の場所が記憶にない。大切な人なはずなのに
「そうだよ。まったくもう…」
アクアはその後もぶつぶついろんなことを言っている。
霧也は内心怖かった。そんなことも覚えていない自分が。
怖かった。

その洞窟はうす暗く、でも松明の明かりで少し明るかった。
そこにかすかな人影が見えた。よく目立つ赤い長髪。
間違いない、市谷　宗だ
「べ、ベターだ…ってそんなことはどうでもいいんだよ
市谷、少しききたいことがあるんだ」
「なんだ？俺はいそがしいんだ。手短にしてくれ。」
霧也達はまず、鈴の墓石に手を合わせた。

そして霧也達は市谷に状況を説明する。
そして情報の提示を求めた
「…というわけなんだけど」
「それなら、お前のほうが詳しいんじゃないか？朱雀　霧也」
霧也は唖然とした。

自分は大戦には参加していない。
なのに、目の前の市谷は自分のほうが詳しいという。
意味がわからない
「なんで？おれ大戦には参加してませんし、大戦で活躍したあなたのほうが詳しいでしょう？」
霧也は一生懸命に言う。

「…ふっ…やっぱりか…」
「何？」
あ、いやなんでもないと市谷は言う。
霧也は言い表しようのない不安に襲われていた。

覚えていないはずないことを覚えていなかったり
大戦に詳しいといわれたり。
「まぁいいそういうことなら力を貸そう。情報を素直に書きだすことはできないが
情報を手に入れる手っとり早いすべなら教えてやる。朱雀にはものすごく危険だが。いいか？」
霧也はびくりとした。

自分にとってはものすごくきけん？
なんで？
「う、うん。」
「なら、ついてこい。」

霧也達は市谷についていくことにした。
市谷はどこまでも気楽なイタリア人二人に呆れつつもきちんと案内をした。

そして連れてこられた場所。
騎士整備工場とつぶれかけの看板が立ててあった。
この言葉に少しいやな予感がしたが、それがなんなのか今の霧也には皆目見当つかなかった
「騎士整備工場、ここでお前の脳を調べさせてもらう。なぁに心配はするな。ちょっと記憶を取り戻すだけだ」

記憶を取り戻す…？
なんのこと？と霧也は思った。

「記憶を取り戻すって？どういうこと？」
霧也より先に美佳が尋ねた。

市谷は扉を開けた。そこは思ったより明るく
機材がものすごく整っていた。
「簡単なことだ、朱雀は記憶を失っている。だから呼び戻す。ほら
ここに寝転がれ、話はそのあとだ。」

霧也は言われるがままベッドに横になった。
すると市谷はパネルを操作しだす。
コンクリートの壁、床、天井。
いまどきこんな施設ないだろうと思ったが、こんな荒地なのだから
しかたがない。

窓はなく、日は全く入ってこない。
照明だけの明るさ。寂しい明るさだ。
霧也の頭になにかの装置がとりつけられた。
美佳は自然と顔をゆがめる。

心配なのだろう。イタリア人二人は心配ないと美佳を慰めている。
「記憶がないって…なんで…いつの…」
美佳は取り乱しそうになった。
「安心しろ。今から思い出す記憶はお前にとっても関係ある、それ
にこいつにとってこの先必要な記憶だ。」

「私にとっても？」
と美佳は首をかしげる。
まぁ、記憶をなくしてた人が記憶を思い出すというのは
普通ならありがたいことなのだが、霧也は自分が記憶をなくしてる
ということを
知らなかった。だから不安なのだ。

そして、数十分後

「ふー…成功だ。起きろ、朱雀」
「ん。んー…」
美佳は思わず霧也に駆け寄った。
イタリア人二人もそれに次いで霧也のところに行った。

「大丈夫？」
「美佳…？」
え…？っと美佳は驚いた。
なんだこの違和感は。

あたりは騒然となった。
市谷はこつこつと階段を下って霧也達のところに来る。
「それは、記憶を思い出したショック症状だ。すぐに元通りになる。
そしたら話を聞こうじゃないか」
すぐに元通りになるというが、美佳は心配だった。

霧也の目からは生気が抜け、ずっとふらふらし言葉もおぼつかない

表情というものがなく、言葉も棒読み。
「霧也…」
美佳は愕然とした。
すぐもとに戻るとはいえ、万が一戻らなかったら…

不安がよぎる。そんな美佳をイタリア人二人は慰める。
そして、ひとまず家に帰ることにした。
市谷は近くにいるそうだ。戻るまで仕事は中断。
戻ってしばらくしたら仕事再開。

美佳達は家に帰ってきた。
イタリア人二人はお腹すいたと言って自分たちで料理を作っている。
自慢のイタリア料理だろうか。

その間も美佳はずっと泣きじゃくっていた。
「美・・佳・・なく・・な・・」

霧也は弱い力で美佳の頭をぽんっとたたいた。
美佳は涙を拭きながら、そっと微笑みかけた。
「うん。ごめんね？」
「さ、できたぜよ～」
「はぁい、美佳ちゃんも食べぇーやぁ？」

コッロは美佳の前に料理を差し出す。
「こういうときはうまいもん食うのが一番ぜよ」
美佳はうんとだけ答え、３人で食べ始めた。
そしてその日はそのまま寝てしまった。
時刻は午後５時早すぎる就寝だった。

？　ー旅人の唄ー　？章ー第3次大戦の記憶（後書き）

ふー
展開早いかもしれませんね
今回は祐輝の記憶の話でしたね
やっぱりあれですね似非京都弁イタリア人は
影がうすい笑

まぁ、後々重要人物ですから
はい笑

だって？のサブタイトル
旅人の唄ですし
イタリア人二人が重要な役をしてくれないと困りますよね
わかります笑

もう？のプロット終わりまでできてるので勉強の合間にでもかきますよ

はい質問でーす

寄せられた？質問に答えます。
質問してくれた人は匿名で
この小説のキャラが言ってる感じにします

市谷「はたして時雨　恵はきちんと勉強しているのか」

A．してます。がんばってるんですよ？笑

一応受験生なんでね
高校志望校にいかないとやばいんです
公立いかないとお小遣い0になるんです笑

これまじですよっ！！

質問？
美佳「なんでイタリア人にぜよとか喋らせたの？」

A．えっと、インパクトあるかなと笑
だって、イタリア人が「～ぜよー」
とか「～やんとか」

ほら、テレビでも外国人が関西弁使うときありますよね？
そこ結構うけてるじゃないですか

それを参考にしました

なんか最初の質問あれでしたけど
ありがとうございますね

ちなみにこの第1回目の質問コーナーはリア友に
質問されたことです笑

では質問はメッセ飛ばしてくださいね

感想もお待ちしています
あとがきながいよってそうですね笑

長いですね笑
でも、あとがきって書いてて楽しくないですか？

？　ー旅人の唄ー　？章ー報酬ー

３章―報酬―

「美佳、美佳、美佳！」
美佳は誰かに起こされているような気がした。
聞いたことある声だ。

聞いたことあるどころか、聴きなれている。
「ん…ふぁ～…」
美佳はやっとのこと目がさめた。
声がし始めてから１０分は経っている。

窓から降り注ぐ日差しがまぶしく、美佳はなかなか目があけられなかった。
「ふー。やっと起きたね。ほら、霧也のお目覚めだよ？」
「ん…？霧也？あっ！戻ったんだぁっ！」

美佳はまだ光になれない目をこじ開け、
目の前の人物を見る。
若干呆れながら頬笑んでいる。

霧也だ。
ショック状態から１日で立ち直ったのだ。

「カッミノさん、コッロさん！霧也が起きましたよー」
二人も飛び起きた。

そして霧也のもとにかけよる。
何度も目をこすって、頬をつねっている。
「幻やないぜよー」
「誰が幻だよ」

霧也が突っ込みを入れると同時に
みんながいっせいに笑いだす。
美佳はそれがうれしかった。昨日はどうなるかと心配したけど
やっぱり市谷さんの言うとおりなんだと安心した

「あっあのさ、昏睡状態？になっているときにさいろいろなこと思い出したんだー」
「おっ！なんぜよーっ」
イタリア人二人が異様にくいついた。

仕事のこととはいえ、なぜここまでに食いつくのか美佳と霧也は理解ができなかった。
霧也に詰め寄り、なんぜよなんぜよとくりかえし問う。
まぁまぁあわてるなと祐輝はなだめる。
「今から話すからさ、えっとー…」
霧也はいろいろ語り始めた。

第3次世界大戦に自分が参加していたこと、そして途中から
抜けだして人々を非難させたこと。
平塚　鈴の詳しいこと。日々の楽しい出来事から辛い出来事まで
あらゆることを思い出した。

だがまだ霧也には少しだけ引っかかることがあった。
「そうだったんだぁー非難させたんだね、立派だね霧也」
「立派なんてもんじゃないよ。ただ人を斬るのが怖くなっただけだ
からさ」
イタリア人二人は食いついてきたわりには黙りこみ、難しい顔をし
ている。
「いやーそれが大切なことだとあたしは思うよ」

その後もいろいろ会話が続いたが
イタリア人二人はいつになく真剣な表情で、何かを考えているよう
だった
霧也にはそれがなんなのか全く見当すらつかなかった

「さてと、じゃぁおれ今から紙にうつして渡してくるから」
霧也は紙に思い出した情報を書いている。
もちろんこれは極秘情報なので便利屋の園で直接依頼者に渡される
通常は仲立ち人がいるのだがこういう極秘事項については

依頼者に直接なのだ。
「じゃ、行ってきます」

霧也は書き終わるとさっそく家を飛び出していった。
今日は走って便利屋の園に向かった。
走っていると、自分の周りに風がまとわりつくような感覚に襲われる。
風をきる自分。まわりの景色も走る速さに合わせて早く流れていく

今日は日が結構照っていて暑いが、まとわりつく風がその暑さを中和してくれて
程よく気持ちがいい。
そうして風を感じながらしばらく走ると

便利屋の園の扉が見えた。この扉はどうも重い。
普通に開けようと思ったら何十人と連れてこなければ無理だ。
だからここには魔法陣が書いてあり、それに手を触れると便利屋の園に登録されているか認証し、あけるといった仕組みである。

霧也は中に入り、依頼人を探す。
「便利屋“漆黒の翼―{ダークピジョン}”です！依頼者の方いませんか？」

霧也は大声で自分の所属を述べる。

この名前は美佳がつけた名前だ。なんとなく響きがかっこいいかららしい。
専用の飛行艇にも同じ名前をつけた。
ほんとに女の子がつけたとは思えないような名前だが、霧也自身も気にいっていた。
「依頼者は私だが？」

一人の男がやってきた。
この男には霧也はなにか見覚えがあった。

だが、このとき霧也はそれがなぜなのかはわからなかった。
「報酬はここにある。早く情報を渡してくれまいか？」
「あ、はい。これは極秘事項なので決して口外しないようにしてくださいね
口外した場合はあなたは重罪人として死刑になります。」

男はわかった。といい、報酬を渡して情報を書いたかみを受け取った。
「では、これで仕事は終わりということで。ありがとうございました」
霧也は便利屋の園を出て行った。

今度は歩いてゆっくり街並みを楽しみながら帰ることにした
霧也は人間ウォッチングが好きなのだ。
人の会話を横できくとか、人の行動を見たりとか

そういう何気ないことを楽しむ変わった人物だ。
人によってはいやな人かもしれないけど、でも
霧也は人の会話を聞くのが一番好き。

たとえば、「なぁなぁ昨日の〇〇見たぁ？あれめっちゃおもろいやんな
そういえばさ〇〇って何年生まれか知ってる？
西暦２１２０年。４月４日。兵庫生まれ。その後…」

のように日常のテレビの会話。
こんなところに笑い要素と兼ね備えて
知識だって詰まっている。くだらない無駄知識かもしれないが

そういうことを逃さず聞くことが大切なのだと霧也は思う。
「最近の人はおもしろいなぁ」
霧也は歩きながら思わず言葉を漏らした。

笑うのは必死にこらえ、それでもどこか楽しそうだ。
家に帰るまでの間に１０個くらいトリビアと呼ばれる無駄知識を発見した。

「ただいまぁー」

「おっかえりぃーっ　ねぇ、報酬は？おいくら？おいくらですかぁっ？」
美佳は目を銭色にかえ、霧也の鞄を見つめながら早口で問いかけてくる。
どんだけお金に執着しているのだろうと霧也は突っ込みたくなった

「お前はどんだけ金なんだよ。おれもまだ開けてない。第一金とは限らないでしょ？」
美佳は早く早くーっと玄関先でせかす。
「とりあえず、おれを中にいれてくれ」
霧也は笑いながら美佳の肩をたたいた。

そして、中に入りイタリア人二人と美佳全員そろって報酬を開けることにした。
「じゃぁ、あけるよー…オープンっ！」
霧也は袋の紐をゆるめる。そして、あいた。

そこに入っていたものは１０万円のお金となにかのおふだ。

「おぉーっ！１０万円―っ！」
美佳とイタリア人二人はお金にくいついた。
５万円を貯金。残り５万円を山分けした。

「あのさぁ、お前らこのおふだは気にならないのかよ。
どっちかというとこっちの方が興味そそられるだろ？普通」
霧也はお札をひらつかせながら言う。

「んー気になるは気になるんだけどぉ～…
やっぱお金っ！！…うっへぃ…！　ったぁ…」
霧也は美佳に軽いチョップを入れた。「もぉ～痛いよ～」
と美佳はむくれる。

「ちょっとはまじめにしろよなぁ」
「そりゃぁ朱雀はんには言われとうないと思うで？」
普段口を滅多に開かないコッロが美佳をフォローする。

霧也は「はぁ～」とため息をつき、「まぁいいや」とそのおふだを
服のポケットに入れた。
そして自分の取り分のお金を財布に入れ、５万円は金庫につめた。
「ねぇねぇっ」

美佳が飛びついてきた。
こういうときはたいていなにかを頼んでくるときだ。
「なに？」

「あのね、霧也最近疲れてるでしょ？いろいろあったし、だからぁー
みんなで考えたの。」

あれ？と霧也は違和感を覚えた。
でも、俺を気遣ってくれてるのかなと少しうれしくなった
「明日、遊園地行かない？４人で」

霧也の顔がまるで花のつぼみが花開くように明るく開花した。
霧也は昔から遊園地とかゲームセンターが好きなのだ。
美佳はそれを知っている。美佳も遊園地やゲームセンターが大好き
なのでこういう提案になったのだろう。

「行く行くっ！ありがとうーっ！」
「お金はぁーもちろんー…？」
「朱雀もちぜよ～」
「えぇーっ！何故におれもち！？こういうのは普通提案者であるあ
なたがたが出すもんでしょ？…ま、いいや提案してくれただけうれ
しいし」
霧也は納得した。

納得してはいけなかったのだろうが、遊園地に行こうと申しだして
くれた3人に申し訳ないので、納得することにした。
「楽しみだなぁ～…でも、このメンバーで遊園地ってなんかものす
ご～～～く大変なことになりそうな気が…」

そう、かつての美佳とのゲームセンターでの技のぶつけ合いのように
対戦型アトラクションでは必ずと言っていいほど能力のぶつけ合い
になるだろう。

能力者3人騎士1人。
このメンツで遊園地に行くということは…と霧也は一瞬考えた。

「なぁに言ってんのーっ楽しいに決まってるじゃないっ、ね？」
「そうだね。おれの思い違いだねごめんごめん。」
霧也はその日中ずっとうきうきしていた。
テンションはＭＡＸ！といった感じだろう
そしてその日は早めにねることにした。

そしてやってきた遊園地当日
霧也達はものすごく早く起きた。
やっぱりまだ１０代の子供。普通なら学校に通っている普通の子供なのだ。

「霧也、そろそろ行くよ～」
はぁいと返事をし、朝早く家を出て行った。
家を出ると日差しが眩しくて、くらくらしそうになった

「それにしてもさぁー遊園地って久しぶりだよねー」
歩きながら霧也は美佳に話しかけた。
とりあえず駅に向かって歩いている。まさか遊園地に飛行艇で行くなどということはしない。電車で行くんだ。

「だよねー何年ぶりだろねー3年ぶりくらいかなぁー」
美佳は昔を懐かしむ言い方で空を見上げながら言った。
イタリア人二人は二人の会話を聞いてうれしそうな顔をしている
平穏が一番いいとみんなこのとき実感した。
そして駅についた。

「おれ電車って初めてなんだよなぁー」
と霧也はちょっと興奮している。
初めての電車。

なんでも初めてのとつくと興奮するもんだ
たとえば、ベターだけど初めてのおつかい
初めての学校。
これらはとってもわくわくする。

今まさに霧也はその状態だ。
「ちょっと落ち着いてって。周りの人の迷惑になるでしょ」
「ほんと子供ぜよ～電車なんておれらは何十回と乗ってきたぜよ」
霧也は、ごめんと笑いながらあやまった。

そして席につくと動き出した。
すると一々霧也は「すごいっすごいよっ」と騒ぎだす。
電車はかなりアナログだ。今はもっと早いものができている。

そのあとも霧也は電車内ですごい子供みたいにはしゃいでいた。
そして数分後遊園地についた。
「ついたぜよ～」
「うち遊園地らきたん１０年ぶりくらいやぁー」
「みんな久しぶりなんだね」

霧也達はゲートをくぐる。
するとものすごい景色が広がっていた
あたり一面の緑。
木々が生い茂っている。

いまどき珍しい場所だった。そして数々のアトラクションがところせましと並んでいる。
ゲームセンターもあるみたいだった。音楽もベターな“ザ・遊園地“というような感じの音楽。
「よっし、遊ぶぞぉ～」
「おぉーっ」

４人一斉に走りだした。
園内では走らない。これが基本なのだが
このときの４人は楽しすぎてその基本さえ忘れていた
この日が霧也達のほんとの意味での報酬なのだろうか。
「あれやろうよっ！」
美佳は霧也達を引っ張って
あるゲームに誘った。

４章に続く

？　ー旅人の唄ー　？章ー報酬ー（後書き）

はいっ！笑
えっとですねー
平和パートがしばらく続きますよ～

この誘ったゲームが・・・・
なんです笑

４章はコメディーぶぶんが強いと思います

さてさてーっ
質問コーナー！

きましたよ。質問が
少し笑

Q？
祐輝「どういうときに物語が思い浮かぶの？」

A．「それはぁー寝る前とか、授業中とかお風呂入ってるときとか
何気ない生活の中でぽっ　っとうかんできます。
そして授業中でもいつでもおかまいなくメモ書き。
もうメモ帳はいつ何時でも持ち歩いてますねｗｗｗ」

とりあえずこれくらいしか

こなかったｏｒｚ

まぁ来ただけうれしいですよっ

次の更新はいつになるかわかりません^^;

受験生だから仕方がないっすよ。はいっ

？　ー旅人の唄ー　？章ゲームという名の真剣勝負ｃｈａｐｔｅｒ？

４章―ゲームという名の真剣勝負―

そのゲームは・・・
「ザ・シューティングブレーカー」
というゲームだった。なんでも
とある機械に乗り込み、それを操作していろいろ装備されているもので
戦うそうだ。能力が影響させられるそうで、美佳がくいついた。

「やっぱり予想的中だなぁー」
霧也は乗り込みながらそうつぶやいた。

モニターからは参加者全員の顔が映し出される。
そしてかなり本格的だ。装備がとにかくリアル。
「これは本当に遊園地のアトラクションですか」

笑いながらそうつぶやき、画面から美佳が突っ込んできた
「“なにいってんのよーザ・アトラクションじゃない”」
そうこうしているうちにゲームが始まったようだ。

これは、どうやれば勝ちなのかという説明があった。
「相手の機体のターゲットをブレーク。つまり壊したら勝ちってぇ？
簡単だなぁ」

そういいながら霧也は自分の機体を動かす。
まずは相手の出方を探る。それが勝負の基本。
機体は思ったより早く動く。どこぞのロボットアニメのようだ。

背景も宇宙。
そして広さもかなりだ。
「いくぜよーっ！ベクトル変化で強化したこのボールの威力はすさまじいぜよっ」

カッミノの機体からものすごい勢いでボールが霧也の機体に飛んできた。
そしてそれをかわした。

これはどうやら脳につながっているみたいで、能力が影響される。
ということは騎士モードだって使えるわけだ。
どうやらヘルメットが脳につながっているみたい。

（騎士霧也起動。脳内回路を秒速１ｋｍに固定。運動制御を解除。運動速度分速１０ｋｍに固定。）
戦闘起動とまではいかなかったが、運動制御をちょっと解除した。

「今度はこっちの番だぁっ」
霧也は装備の中で一番自分にあったものを1個とりだした。

それは剣だった。

もちろんこれはビジョンなので機体に本当に傷はいかないが
みかけでは傷がいって、自分にも多少の衝撃が加わるというリアル
な仕組みなので
これがおもしろいかと思った。
「おれはやっぱり剣がいいよね。
天下無双だよっ　・・・ってこれどっかで聞いた響きだな」
そういうと分速１０ｋｍの速さでカッミノに突っ込んでいった
そして美佳もカッミノに電磁砲（鉄の弾に電磁を帯びさせている）
を浴びせる。
これは、美佳＆霧也ＶＳイタリア人二人なのだ。

「おれの能力をお忘れぜよ？それくらいなんちゃらないぜよーっ」
カッミノの機体は霧也の機体の剣を防ぎ、つきとばした。
そして電磁砲も反射され、美佳の機体に飛んでくる。

それをかわす。
そしてコッロが攻撃をしかけている。
自機をテレポートし、ボムを相手の機体にテレポートさせる。

美佳と霧也の機体はそれをよけて、同時にボールをうった。
それはむなしく宙をまい、当たらずじまい。
「やっぱり強いなぁ。よし美佳、あれやるよ。」

「あれね、おっけー」
そういうと霧也は意識エネルギーを放出しはじめた。
このときの色は青。アクアの意識エネルギーを借りる。

黒は危険なのだ。
「来たぜよ。騎士特有の意識エネルギーの放出」
意識エネルギーとはその通りエネルギーのことで
イメージすることであらゆる姿形になる。

炎をイメージすれば炎に。
雷をイメージすれば雷に。意識術とはこのことをいう。
「そして、あたしの帯電っ」
（意識エネルギーを水に変換）
霧也は魔法陣を宙に描いた。

「意識術：水龍」
意識エネルギーは龍の姿をした水に変換される。
意識術に名前などない。水龍は勝手に霧也がつけた名前だ

「だいたいはよめるぜよ」
霧也は水龍をカッミノとコッロに同時にうちだす。
そして目を閉じている。
それとほぼ同時に美佳が電磁砲を水龍にぶつける。

そう、水は電気をよく通し、威力を増大させる

「さぁ、それはどうかなぁ～　おれが単純な攻撃すると思う？」
「なにが来てもおれのベクトル変化で跳ね返してやるぜよ～」
「うちのマルチスキルなめてもらっても困るで？」

電撃を帯びた水龍はカッミノの機体に到達した。
そしてベクトル変化される。
その直前水龍は３つに増殖した。
「なっ…！」

「予想外だろ？たしかベクトル変化は同時に２個以上は無理なはずだ。」
電撃を帯びた水龍は四方からカッミノの機体におそいかかる。
そして、霧也の予想通りベクトル変化は１つにしか作動しなかった。
そしてカッミノの機体はロストアウト

つまりゲームから退場。まけ。
そしてそれと同時にコッロの機体にも水龍が来る。
「テレポート！」

コッロの機体は霧也の機体の後ろにテレポートした。
「うちのテレポートなめたらあかんよ？
さてと、とった！」

そしてコッロは装備の中から剣を取り出し、振り上げた。
コッロは霧也を倒すことに執着していて

後に気がつかなかった。
水龍は後に3体いる。
そして、おそいかかりかわせずロストアウト。
「うわぁっ！」

コッロは悲鳴を上げ、消えた。
そしてゲームが終了。バーチャルルームに戻った。
「いやぁ～強いぜよ～さすがなコンビネーション技」
「ありがとうーっ　あたしらの絆は切っても切れないんだからねっ」
霧也は若干照れている。

次にやるアトラクションを探しながら美佳は霧也を辱めることをいっぱい言ってくる
その中には意味不明なこともある。
「霧也ってねぇー昔からいろんなフラグ立てるんだよ？
たとえばぁー…」

「ちょっ！ちょいタンマ！美佳、なんて話してるんだよ。それにおれがいつフラグたてたぁっ」
霧也は呆れ笑いを浮かべながらつっこむ。
その間イタリア人二人はわらいぱなしだった。
その間コッロは笑いながらも次にやりたいアトラクションをさがしていた。

「うち、これやりたいんやけど～ええ？」
「なになにぃー？」

「エキサイト・バスター」
「エキサイト…おれはぁ遠慮しとくわ」
霧也はちょっとした拒否をした。

美佳達が顔を覗き込んでいる。
「いいからいくわよっ！」
「ちょっ！おれはいいってっ！昔からエキサイトと付くアトラクションはろくなことがぁ！たとえばっ！えーっとーっ…どこかの遊園地のエキサイト・ザ・エンター〇ライスとか、エキサイト・マウ〇テンとかぁっ！」

霧也は一生懸命早口で反論したが、美佳達に引っ張られていった。
さっきのアトラクションからそのエキサイト・バスターまではそう遠くはなく
人も並んでいる様子はなかった・・・

？　ー旅人の唄ー　？章ゲームという名の真剣勝負ｃｈａｐｔｅｒ？（後書き）

途中できりました
長いし
うんｗ強引だけどね
あははーｗｗ

えっとですね平和？なパートですね
ゲームという名の真剣勝負です
ゲームは常に真剣勝負ですけどね

このゲームはほんと危険ですね
そして次のエキサイト・・が
くふふふな感じなんですよ
はいｗｗ

あんま言えないんですけどね
うざーいキャラがｗｗｗ
はいおしまい

うはーｗ

読んでくれたみなさん
ありがとうございます
まだまだまだまだまだまだ続きますんで

これからもよろしくおねがいします
処女作のほうもよろしくおねがいしますね

さてさて
今回はここまでにしましょう
勉強せなあかんのですよ

ではっ！
感想、お待ちしています
感想くれたら絶対遊びにいきますから
そっちに勉強の合間に

？　ー旅人の唄ー　？章ゲームという名の真剣勝負ｃｈａｐｔｅｒ？

「ついたわね」
「あー・・ついに来てしまったっぁ」
「でも朱雀はんが言うような感じやなさそうやで？」

霧也は説明書きを見た。
なんでも、バーチャル空間で能力を駆使し敵を薙ぎ払うスピードを競うらしい。
「へぇー。よかったぁ～絶叫とかじゃなくて…」
「バスターってのでわかるでしょ。ばかなんだからぁ」

「ばかいうなよーっ」
「ごめんごめん。とにかく入ろ？」
霧也達は中へと入って行った。

そして中はさっきのアトラクションと同じようなバーチャルルームだった。
そしてこれは個人戦のようで、霧也とコッロがやることになった。
「…おれからかよ」

「いいやんー後のほうが勝手がわかってええしねっ」
「…せこい…」

「だってぇー朱雀はん騎士やし？」

「そうだなぁ～。じゃぁやるか」

そして霧也はスイッチを入れ、ゲームを開始した。
するとすごくうさんくさいみるからに遊園地のアトラクション案内の機械のような声が
流れてきた。

『はぁ～い♪ようこそーエ・キ・サ・イ・ト！！・バスターへ』
「エキサイト強調するなよっ…ってなんで案内の機械につっこみいれてんだぁ…？」
霧也は軽いため息をついた。

自分はそんなに寂しい人間だったのかと少し落胆した
『だまって聞きましょうねー？…次なんかいったら…どうなるかわかってますよね？』
「って、案内の機械やないんかぃっ！人ですかっ？人が入ってたんですかっ」

霧也はあまりの衝撃に少しイタリア人二人っぽくなった。
長いこと一緒にいすぎてすこし移ったのだろう。
まぁもともとこういう突っ込みキャラ的要素はあったわけだけど
『だからー黙って聞きましょう言いましたよね？』

どこからか銃声が響いた。
おそらく空砲。というか空砲ではないと困る。
どんな遊園地だよと霧也は心の中でつっこんだ。
「はいっ、すいません」
『よろしいです。ではぁー説明させていただきまぁーす』

ちょっと怖い案内の“人”だ。
『まぁ簡単にいうとですねー能力を使ってもいいので、そこに置いてある剣やらなんやらを手に取り、てりゃーおりゃーと出てくるものすべてぶった切ればいいんです。わかりましたか？』
「わかるわけな…あぁ、はいはい、わかりましたー」

わかるわけないだろうと突っ込もうとしたが、怖いのでやめた。
まったく、どんだけアバウトな説明だよ。と
“心の中で”思った。

しかもてりゃーおりゃーはものすごく棒読み
『それではぁ～ゲームスタートっ！』
【バンバンっ！】

「始まりの合図も銃声かよっ！
たく、どんだけあれな遊園地なんだぁ？能力者や騎士以外の人にとうていついていける感じとは思えん・・」

霧也はそうぼやきつつも、置いてある剣をてにとり
駈け出した。
（騎士霧也起動：脳内回路を秒速１ｋｍに設定。運動制御解除。
運動速度を分速５ｋｍに固定。前方にターゲット確認。距離１ｋｍ
弱）
「弱っ！？なんでこんなあいまいな数字に…
あ、そうかバーチャルだからか・・あぁーね。納得」
霧也は言いながらターゲットを斬った。

そのターゲットはどこかのゲームに出てきそうな
青色の変な形をした…口が赤くて大きくて目が大きい
○ラ○ムのような感じだった。

（ターゲット撃破：次の目標に向かいます。最短のターゲットはこ
こより南南東の方角に？ｋｍ弱。）
「おーらぃっ！…ってとうとう自分の脳にまで返事を…末期だな。」
霧也は駈け出しながらそう言った。

いつの間に自分はこんなにはっちゃけた人になったのだろうと少し
考えた。
「あれ？ターゲットの姿形が変わったなぁ～強さもかわったのかな
？」
その姿は…
かなりでかくなっていた。さっきのはノートパソコン程度の大きさ
だったが
今度のはスクールバック×１０といったところか。

「とりあえず斬る！」
霧也は横に剣を払ってみた。
するとそのターゲットは防ぎだす。

「ほぅ、防御をするようになったか。まだ2番目なのにすごい進歩じゃんか…
でも、まぁ弱いよね」
今度は剣を縦横斜め横斜め縦とでたらめにふるってみた。

もちろん早さはものすごい
2発程度で防げなくなり、3回も斬りつけた。
「よし、撃破っ！さてと～お次の相手はぁーっと」

（ターゲット撃破：次のターゲットに向かいます。最短のターゲットは、ここより北へ0．5km）
「あいつかっ！んー見かけ的には弱そうだな。さっきの青くて小さいやつとあまり見た目かわんないし」
「キシャァーッ！」

「ちょっ…！泣き声どうにかしろよ。見た目かわいいっぽなのにこの泣き声ないだろ」
そのターゲットは攻撃してきた。
なにやら瘴気のようなものをはいてきた。

「これは当たったらやばそうだなぁー…リアルだと。」

（攻撃感知：毒素を含む気体。回避。）
霧也は次々に飛んでくる瘴気をものすごい速さでかわす。
そしてものすごい速さで次々と攻撃してくるあれは何者なのだろうか。

「ちょっ！あれはんぱねーっ！普通に強いじゃん！やっぱ人はみかけによらないってか？・・・って人じゃないな」
霧也はかわしながら前に進む。

そしてついにやつの懐にもぐりこんだ。
「じゃ、遠慮なく行かせてもらいますよっと！」

そいつの腹（どこからどこまでが頭でどこからが腹なのかはわかんないが）を
斬った。
そしてその後も次々とターゲットをなぎ倒していく。

「多すぎだろ！これ。絶対騎士や能力者以外よりつかないよな…てかよりつけないよな…」
『はぁーいお疲れねーラストはぁーこれよーん』
少しずつラストのターゲット
いわゆるラスボスは姿を現した。

そして第1声
「あんたぁー意外とやるわねー生意気言ってたのはだてじゃないってか」
聴いた声。
そして手にもってるのは2丁拳銃。

ここまででわかる人はわかるだろう。
「お前かよっ！案内の人じゃなかったの？」
「案内の人がゲームに出てきて悪いかしら？」

「いやぁー普通出てこないもんだと思いますよー？…まぁいいけど、始めましょうよ。」
霧也は身構える。
すると案内の人もといラスボスも身構える。
そして同時に駆け出した。

案内の人（仮）は走りながら次々と銃を撃ってくる。
そしてそれをひとつひとつかわし、敵の懐にもぐりこむ。
「もらったぁっ！」
「甘いわねーっ」

案内の人（仮）はすぐさま横に跳躍しよけた。
そして、間髪いれずに撃ってくる。
「へぇーなかなかやるようですね。なんだか楽しくなってきたなぁー」

「あら、それはよかった。思う存分楽しんでもらわないと…ね！！」
案内の人（仮）は銃のカートリッジを取り出し、ちがうカートリッジをセットした。
２丁とも同じ種類なのかちがう種類なのかは早すぎてよくわからなかった。
「さぁ、ここからがショータイムよ～ん」

そういうと、さっきつめた銃を右手のを先に、続いて左と言う風に撃ってきた。
「ちょっ！水と電気とか！なんですかーっその銃はぁ～能力者の能力をつめこんだみたいな感じですねー」

「ピンポーン♪そのとおりよーん。このカートリッジは能力者のデータが入っているの。そのデータをもとにして、そういう効果を得ているわけ。」
「へぇーいいですねーおもしろいっ！」

（意識エネルギー放出：騎士剣アクアの意識エネルギーを使います。）
やっぱり黒は危険なのでアクアの意識エネルギーを使うことにした。
≪ちょっ！もう、さっきからさっきからぁっ！！…あたしのをそんなに使わないでよねっ≫
≪ごめんごめん≫
「へぇー意識エネルギーねぇー本気出したってわけだぁー」

「どうかなぁー」
（イメージ。炎の弾）
霧也は神速で宙に魔法陣を書いた。
「意識術。炎弾！！」
炎の弾が案内の人（仮）に向けて飛ぶ。

だが、炎。霧也は相手には水があることを忘れていた…
「炎は通じないって～♪」
「わかってるよ」
（イメージ。分散。物質変換：槍）

わけではないようだ。
分散した炎は槍に幾本もの槍にかわる。
水は当然通じない。

幾本もの槍は相手を取り囲むようにして飛んでゆく。
そしてすぐに、決着がついた。

「なっ…！ふー…あたしのまけねー」
「よし。勝ったぁ」
「タイムは2分ってとこね。1位よ。まぁあたしを倒したのはあんたが初めてだからぁータイム関係なく1位だけどねーん」

（起動終了。脳内回路を通常速度に固定。運動制御をかけ、終了します。

次回起動可能時３０分後）
霧也はバーチャルルームからでた。

すると、モニターからきっちり見ていた美佳やイタリア人二人が駆け寄ってきた。
「すごいよっ！すごいよっ！」
「いいもん見してもらったぜよ～」
「ほんなら次はうちの番やね」

みんな若干興奮している様子だった。
≪もう、ほんとに遊園地のアトラクションで意識エネルギー流してぇ～何考えてんのよ≫
≪ごめんごめん。でもみんな喜んでくれてるし、いいんじゃない？≫

アクアだけは、少し呆れ気味だ
「じゃ、いってきまぁーす」
今度はコッロが入っていった。

生であの案内の人を見るとさすがのコッロも衝撃をうけるだろうと考えたが、モニターから見ているとなぜかすごい打ち解けている
しかも最初のうちから

「どういうことだ…」
「どうしたの？」
「ん。いやぁーあの案内の人（仮）となんで打ち解けられるのかな

ぁーと思って」
「そんなことかよ」

美佳は呆れ笑う。
「あたしはあの人つぼだったなぁ～」
こうやって話している間もコッロはゲームに挑んでいる。
1つ目撃破。

「言うけどさぁー生でみたら呆れるってまじで
突っ込みどころ満載だから」
2つ目撃破

「にしてもコッロの能力ってすごいよなぁ～」
3つ目撃破
「そうねぇーマルチでしょ？」
「ねえやんはぁーすごいどころやないぜよーまぁこの話は追々する
ということでー」

5つめ撃破。
「うわぁ～早いなぁー…まぁおれには及ばないけどね」
6つ目撃破

「そりゃぁあんたは騎士だし、運動速度変えれるんだから速いのは
当たり前でしょ」
7つ目撃破

「ん。まぁそうだけどさぁ…
あ、例の人きた」
「よっ！でましたっ案内の人ぉーっ！」
「ちょ、お前テンションあがりすぎ」
「しょうがないぜよー　あの案内の人おもろいんだし」
「あ、今一瞬普通の喋り方になった。」

コッロは案内の人といい勝負をしている。
案内の人は手の打ちをまだすべてはだしていないだろう。
まだ銃弾だ。
「うわぁ～この銃撃戦はすごいなぁー」
「コッロさんのテレポートでひたすら跳ね返してるよね。流石だね
動体視力半端ないよねこれ」

コッロは案内の人（仮）と激しい銃撃戦をしている。
というのも向こうが撃った弾をテレポートで跳ね返しているという
だけなのだが
それが銃撃戦に見えるのだろう。
「あ、そろそろ案内の人本気出してきたみたいぜよ？」
「ほんとだねー」
「どこか棒読みだねーあんた」

ゆったりとしたボケと突っ込み
これが霧也と美佳のボケと突っ込みなのだ。

そうこうしてる間に案内の人（仮）はカートリッジを取り換える。
そして間髪いれず撃ちまくる

「へぇーやっぱりすごいなぁ～でもコッロさんの能力なら勝てるね」
「そうだね勝てる。」
「もち。勝てるぜよー」

モニターを見ながらみんながうなずいている
そしてコッロはやっぱり勝利。
「すごかったよ～コッロさん」
「ねぇやんさすがぜよー」
「でもタイムは朱雀はんにはかなわんかったけどね」
「タイムなんて関係ないっすよ」

コッロが出てきたので移動することにした。
園内を歩くのもまた遊園地の楽しみのひとつだ。
少し遠くまで歩くことにした
「歩くの疲れたぁ～」
「はやっ！」

美佳が数分後言った言葉だ。
霧也は間髪いれず突っ込む
「うー…ん？あっ！そこのカフェー？で一休みしようよっ？　ね、そうしよう。うんそうしよう」
「はいはいわかったじゃ、休もっか」
霧也は呆れ笑いで言う

イタリア人も疲れている様子なのでちょうど良いのかもしれない
そもそも2つしかアトラクションしていないのにこの疲労感はなんなのだろう

「あぁーおれエスプレッソと、プリンを一つ。あ、ほっとでね」
「エスプレッソとプリンをほっとでおひとつ。他は？」

ウエイトレスが注文を取る
メモ帳だ。アナログだ。
「あぁーっはいっ！あたしはぁレモンティーとバニラアイス一つ！」
「レモンティーとバニラアイスをおひとつ。他は？」

今いるカフェには日の光がもろに降り注ぎ、
少し暑い。そこでホットコーヒーを頼んだ霧也はなんなのだと思うだろうが
ものすごい暑がりなのだからしかたがない
「じゃぁ俺はぁ～コーラとクッキー頼むぜよ～」

「うちはメロンソーダとマシュマロで」
「コーラとクッキー、メロンソーダとマシュマロ。
以上でよろしいでしょうか？」
「はい」

「では少々お待ちください」
ウエイトレスは半ば走って店の奥に向かった。
今でもウエイトレスはメモ書き。

服装もメイド姿。昔ながらだ。
「お前さぁ～コーラとクッキーってなんか変じゃない？」
「なんぜよ～」
「いやぁー炭酸とクッキーってなんか、うん。イメージがない」
「イメージがなかったらイメージすればいいぜよ～「たまにおれはお前の話がわからんくなる」」
霧也はやや笑った。

やや笑ったというのは変かもしれないが霧也は爆笑することはあまりない。
それ故に“やや“なのだ
「コーラとクッキー、メロンソーダとマシュマロ。レモンティーとバニラアイスをお持ちしました。エスプレッソとプリンは少々お待ちください」
それぞれの物がそれぞれ注文した人の前に

丁寧におかれる。さすがはウエイトレスといったところか小さな気配りもすごい
その気配りが何なのかはイメージに任せよう
「おれのだけまだかょ～…」

「ははははっ　組み合わせ変とかいうからぜよ～　うん。うまい」

「そうやで、朱雀はん。組み合わせに変も変やないもありゃしまへん」
「コッロさんは大阪弁なのか京都弁なのか最近よくわからんくなってきてるんよねー
・・・って、組み合わせね～んー」

霧也は少し考える
自分に変な組み合わせはなかったか。
はたから見ればありえないことはなかったか
「おれがカレーにマヨネーズ入れたりするのと一緒かな」

「そうそう「エスプレッソとプリンをお持ちいたしました。会計のほうこちらに置いておきますね」」
エスプレッソとプリンが運ばれてきた。
エスプレッソからは湯気が立っている
プリンからも湯気が立っている。

ん？
「プリンに…湯気？」
「ほっとと言いましたから・・「いや、コーヒーがほっとっていうことだったんですが…」」
「…「あ、すいません。おれの説明不足ですね。これでいいです」」
ウエイトレスの表情が曇ったのでやや呆れながら彼女の失敗をフォローした。
するとウエイトレスさんは去って行った。

「ホットのプリンも意外といけるかもよ？」
「美佳、それはないって…」
「いける「ほぉ～らぁーありえないと思うことも、意外とありえるんぜよ～」」
「まだその話続いてたの？」
霧也は笑いながら言う。

このときはみんな楽しさのあまり仕事のことや
霧也の記憶のことなどを忘れみな各々思い思いに楽しんでいた。
そして時刻は午後４時。
「そろそろかえろっか」
「あー、うん。そだね疲れたし、かえろっか」
霧也たちは出口へ向かった。
そしてバスに乗り、電車にのり、家につく。
ただいまと扉を開けてその後
みんなそのまま眠りについた。

？　ー旅人の唄ー　？章ゲームという名の真剣勝負ｃｈａｐｔｅｒ？（後書き）

うはぁーｗｗ
ながいですねｗ
読むの大変でしょ？

さてと、遊園地パートは終わりです
次からは少しあれになってきますよ

れっつ・シリアスーです

シリアス好きなんですよね
平和も好きですけど

てか平和好きじゃない人なんていないですけどね
ってそういう話やないってか

今回は会話が多いです。
会話は、もしキャラがそこで喋っていたら
こんな感じなのかなと
普段部活でしている後輩との会話などを参考にしました
会話って話が飛びますからね

ではっ！
読んでくれたみなさんありがとうございますっ

他の作品もよろしくおねがいしますっ

感想おまちしています

？　ー旅人の唄ー　？章：消失

？章―消失―

霧也達が遊園地で遊んでいるころ
アクアは九條　音無とデート（？）の真っ最中だった。
真昼の午後１時。意識界のとあるカフェテラスでほどよい人工の直射日光
にあてられながら紅茶を飲み、楽しい話をしている。

「九條さんはぁー小説とか読むんですかぁ？」
「はい。読みますよ？ライトノベルとか・・「ライトノベル！！私もよく読みますっ」」
「秋野　恵さんのなんかいいですよね。Ｗｏｎｄｅｒ　ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄとか」
「秋野　恵さんっ！！よく読むんですよねー」

中高生などが交わすライトノベルの会話。
秋野　恵とはライトノベル界では有名中の有名で知らない人はいないほどだ
霧也や美佳も大好きな作者である。

「秋野　恵さんは、旅をしながら本を書いていたらしいですね。世界を見て回ったためか
説得力もありますし、物語の世界に引き込まれそうな感じがします。」

「そうですねー。私は難しいことはわかんないんですけど、読ん

でまずすごいと思いました。自分が物語の中にいるようで楽しいです」

九條とアクアは比較的うまくいっている。
気は合えば話もあうし、なによりお互いを尊重しあっている。
だが、アクアは少し目の前の九條に疑いを宿している。

「あの、九條さん。前に兵庫であった人工能力者計画を知っていますか？」
「はい。知っていますよ」
「その時あなたは人間道におりてきてませんでした？あなたの意識を感じたのですが」

アクアは率直に聞いた。そう、
アクアはあの時の指導者の一人は九條ではないかと疑っている
かつて持っていた好意を捨てて、今は敵かもしれないという疑いで彼とあっている。
悲しいことだと呆れるかもしれないが、ほぼ確実なところまで証拠はつかんでいる。

「はい、おりていました。」
「そうですか、変なこと聞いてすみませんでしたぁー」
「いえいえいいんですよ」

九條の顔が今一瞬陰る。
そもそもその証拠というのは何なのかという話だが
一つに兵庫に、人間道におりてきていた。
二つ。これが重要で美佳が話してくれたことなのだが
指導者の外見的特徴が九條　音無と完全一致していた。
名前は彼女は知らなかったらしいから確実ではないが

そして決定的な3つ目
意識ネットワークで調べたところ
最後の一つに九條　音無と書いてあった。
それを見ようとしたらプロテクトが掛けられおり、どうも怪しいと思ったのだった

「それでは、私はこれで失礼しますね。用事があるので」
「はい、お気をつけて」
アクアはそういうとお金を置き、走って家に帰る。
そして霧也にメールを送ろうとしたけど、やめた。
なにも今じゃなくてもいいなと思った。せっかく楽しんでいるんだし。

「ただいまぁーっとぉ～・・・！！」

少し力が抜けた。霧也が意識エネルギーを使ったのだ。
≪もう、なんで私の使うのよ。てか、遊園地でなんで使うのよ≫
≪わりぃわりぃ。ちょっとエキサイティングでさ≫
≪もう・・私疲れてるんだからほどほどにしてね≫
≪じゃ、私もう寝るからね？使いすぎないでよ？≫
≪うん。わかった。ありがとね、おやすみ≫
霧也は礼を言った。
言ったという表現はおかしいが、アクアにはそういう感じに思えるのだ。
≪おやすみ。きりや≫
アクアはすぐ寝入った。
時刻は午後6時。
日が傾きつつあるころ。
かなり早い就寝。

そして朝。
午前８時
「やばいっ寝過したぁっ！！」
今日は霧也との約束。
そこで九條のことを話そうとアクアは考えていた。
≪きりや？起きてる？≫
≪起きてるよ？何？また遅刻？≫
≪ごめんっすぐ行くからぁっ≫

アクアは遅刻常習犯。
それは昔から変わらずだ。
今日も軽く１時間遅刻。
「さてと～っ！準備ぃー」
アクアは鏡の前に駆け込んだ。
準備には最低１０分かかる
≪ちょっと～早くしてよ～？みんな待ってるんだからさあー≫
≪ごめんごめん。もうすぐおわるからぁっ≫
アクアは準備（まぁ髪を整えたりしているくらいだが）をしながら答える。
「よし。終わりぃー」
≪場所どこだっけ？≫

≪家だよ≫
≪りょぉ～かいー≫
アクアは意識した。
人間道の霧也の今の家を。
するとアクアは消える。

「あ、来た来た」
「遅いよ～アクアちゃん」
「美佳ちゃんごめん。みんなもごめぇ～ん」
アクアはぺこぺこお辞儀を3回程度しながら誤る。
みんなはいいよいいよとなだめる。
「で、まずアクアちゃんの話から聞くぜよ～」
「そうしよう」
「えっとねぇ～この前っていってもかなり前だけど
人工能力者計画の真の首謀者についてだよ」
霧也と美佳はくいついた。
美佳は若干うつむいて、顔を曇らせている。
「えっと、美佳ちゃん」
「あ、うん？」
「この人に見覚えない？名前は九條　音無」

そういいながら写真を美佳に見せる。
≪九條音無ってアクアとよく出かけてた人？≫
≪そうだよ…≫
≪そっかぁ…≫
「あぁーっ！！！この人―！！」
「やっぱりね。間違いなかったんだね…どうする？捕まえる？」
「アクア…アクアはいいのか？捕まえちゃって」

「…いいんだよ。そのほうがいい」
アクアは少しうつむいてでも明るい口調で言う。
霧也は「そっか…」とだけ言い、うつむいてしまった。
「とりあえずこの話は保留にするぜよ～次は霧也の話なぁー」
「あぁ…うん」
霧也は顔を上げた。
そして、重い口を開けて言う
「おれはねあれからいろんなことを思い出してさ」
「そいで？」
「自分の中にはとんでもない化け物がいるらしい…」
「ほぅ…化け物…？」

カッミノは表情を変えた。
美佳はとにかく変な顔をして聞いている。
「きりや…それって…」
「アクアの御察しの通りだよ。魔剣っていう意識エネルギーのことさ」
カッミノは立ち上がった。
「どうしたの？カッミノさん」
美佳はかなり疑問に思っている。
なにもいきなり立ち上がることないのに
「魔剣…！ようやく見つけたぜよっ！！」

カッミノはナイフを構え出す。
美佳は必死に止めようとする。
「どうしたの！？カッミノさん。コッロさん何か知ってるんです

か！？」
「うちらはねイタリア首相から直々に魔剣を殺してこいと命を受けたの。
今は便利屋を能力者と一緒にやってるからってあんな依頼だしてねだけど魔剣についての記憶がないみたいだった。だから思い出してから殺すことにしたの」
「つまり…霧也を殺すって言いたいんですか？」
カッミノは美佳を弾き飛ばした。

「美佳！！…カッミノ、殺せるなら殺すがいいさ。だけどおれはまだ死にたくない！」
（騎士霧也戦闘起動：思考回路を秒速１０ｋｍに固定。運動制御解除。運動速度を分速１０ｋｍに固定。意識エネルギー放出：魔剣）
最後にいやなワードが出てきたことを霧也は気付かなかった。
知らないうちに魔剣を出していることも。
「アクア！やるよ！」
「は、はいっ！」
アクアは剣に変わり、霧也の手に吸い込まれていく。
「やっとお出ましぜよ、魔剣士！！」
「おれは魔剣士じゃないっ！！」

霧也はカッミノに向かっていく。
美佳は壁で気を失っている。
コッロはテレポートして霧也の後に回り込む。
それを霧也がみねうちで斬る。
当たった。
「ぐふ…！」

「2回連続同じものをテレポートできない。それを忘れていたか？コッロ」

霧也は序々に声のトーンが変わっていく。姿も黒い意識エネルギーに包まれていく。

「きりや…やめてっ！意識エネルギー放出を止めてっ！！」

≪ごめん。無理だ…おれの意思が通じない。もう自分の意思で喋ることも…≫

霧也は完璧に魔剣にのまれた。

そしてアクアが弾き飛ばされる。

霧也…いや魔剣の手には黒い剣が現れる

≪きりや…≫

アクアは、元の人間の姿に戻る。

そして、手だけを剣化して霧也に立ち向かう。

「コロス…」

「なんぜよ…こいつ、まるで」

「まるで化け物ね」

「この中にはきりやがいます。魔剣だけを剥ぎ取るのはできるのでしょうか？」

「そうね…やってみないとわからない」

「そうですね…」

≪きりや、今助けるからね！≫

アクアは駈け出す。魔剣は、悠々と構えている。

アクアは魔剣に近づくと、剣化した手を中段で横に薙ぎ払う。

魔剣は、よけることもせずそれを“素手で“はじいた。

アクアは吹き飛ばされる。
カッミノがアクアの移動速度を落としたので、壁に当たっても怪我をしなかった。
カッミノが銃を取り出し、魔剣に向けて撃った。
「ベクトル：秒速１０ｋｍ」
その刹那、銃弾が在り得ない速度で魔剣の腹を貫く…
はずだったのだが、あっけなくその銃弾は弾かれる。
コッロはマルチスキルを駆使して必死の闘争を繰り広げる。が、虚しく左腕を斬り裂かれた。
地面に倒れ伏す。
「こんなものか。」
「きりや…っ」
魔剣は皆に背を向け、立ち去ろうとした。
そのとき…
家のドアが開く音がした。
開く。といっても、それは乱暴で、ドアを壊してしまいそうな勢いであった。
ドアの方を見やると、そこには“例の”市谷　宗が立っていた。
大きな大きな剣を携えて、ただ魔剣を睨みつけている。
「っちぃ…っ遅かったか…」
「祐一…さん？」
祐一はそれだけ言うと、剣を構えた。
そして、魔剣に一直線に飛びかかる。
（騎士宗戦闘起動。脳内回路を秒速１５ｋｍに固定。運動制御解除。運動速度を秒速１０ｋｍに固定。意識エネルギー放出。）
目に見えない速さで魔剣に飛びかかる祐一。
まともに見えるのはアクアだけだろう。
宗の尋常じゃないほど素早い動きに呼応するように魔剣もだんだん速度を上げる。
宗赤黒い意識エネルギーを垂れ流し、それらを大いに活用して戦っ

ている。
が、この狭さじゃなかなか意識エネルギーを使えない。
家が壊れてしまうからだ。

といっても、もう十分に壊れているのだが…
だけれどここはアパートメントなので、意識術を使ってしまえばアパートごと粉砕してしまうだろう。
そうなると被害は甚大だ。
だから宗は剣とその動きだけでこの魔剣という化け物と渡り合わなければならないのだ。
右から左から前から上から後ろからと四方八方から飛んでくる剣撃を宗はなんなく弾き、つばぜり合いになったときには、赤黒い意識エネルギーを相手に流す。
人間の脳は自分と違う異質な意識エネルギーを感知すると、脳がパニック症状を起こしてフリーズしてしまう。
だが、騎士の脳にはそれに対抗するプログラミングが施されているので、一瞬フリーズするだけだ。
だけれど、騎士の戦いにおいてそのほんの一瞬が命取りになるのだ。
宗はその隙を狙って、魔剣の腕を一刺しにした。
今はこんな化け物だが、中には霧也がいる。
だから急所を外し、戦闘が不可能な状態にしようと思ったのだ。

「…っ…腕が…腕がぁぁぁ…っ！」
「…これでもう剣は握れまい。…はぁ、はぁ…観念…する…んだな。」
≪おぉいおぉい、宗ぃ大丈夫かよぉ。息、上がってるぜ≫
≪大丈夫だ。久々に戦闘起動したから、疲れているだけだ。≫
「痛いぃ…痛いいいいいいいいいいっぃ！」

「なんだ？」
急に魔剣がうなりだした。
先ほど斬られた腕を押さえているのでなく、胸を押さえている。
「あぁあぁぁぁっぁぁっぁぁあぁあぁぁ…」
「なに…なんなの？」
「あぁぁあぁあぁぁっぁあぁぁ…もう、もう痛いのは嫌だ。
あぁあぁあぁあぁっぁぁあぁぁっぁあぁあぁあぁ！！」
魔剣は胸を押さえたまま、翼を広げてどこかへ飛び去って行った。
残された４人は何が起こったのか分からない様子で魔剣が飛び去って行った後をぼんやりと眺めている。
ただ、この時同時に霧也が…どこかに消えた。
魔剣の消失と共に…

？　ー旅人の唄ー　？章：消失（後書き）

復活です

いやー、共同だったから
相方いなくなると大変ですね
でも大丈夫です
ちゃんと終わらせます

主人公、どこかに消えちゃいましたね
ここからが本番です
やっと本番。
楽しみにしててください

感想は、ブログか
ここの感想欄へと記入してください

ｈｔｔｐ：／／ｐｌａｙｌｏｇ．ｊｐ／ｇｚｚａ／ｂｌｏｇ／
ここがブログです

？　？章「消えた後の世界」

？　？章「消えた後の世界」

３年前、ある人間が。化け物と共に消えた。
それはある一部の人間の心にぽっかりと穴を開け、それ以外の人間は。
そんなこと、知るはずもなかった。
霧也の消失。行方が未だにつかめていない。
美佳は依然と落ち着きを取り戻せないまま。

３年の月日がたったのだ。
心のよりどころをいきなり無くせば、誰だって混乱に陥ってしまう。
それは人間なら仕様のないことだ。
だけれど、２年もたてば人間はそんなことも忘れたようにまた落ち着きを取り戻し完璧にいつもの調子に戻る物なのだ。
だが美佳の場合は、未だに常時上の空状態。
落ちつきも何もあったものじゃない。
それどころか、もう全てがどうでもよいと言った感じで感情を失ったような声で、口調で喋っている始末。宗にまで手を焼かせ、イタリア人二人も甚だ困り果てているのだ。

仕事も美佳は億劫になり、今や宗とイタリア人二人にまかせっきりである。
美佳は常に家でぼけーっとしている。

霧也を失った悲しみ、喪失感はなによりも大きいのだ。

昔から美佳は、ずっと独りだった。戦争で両親を亡くし、ずっと独り。
そして変な研究に明け暮れもした。
そんな美佳の唯一の支えになっていたのが、霧也だった。
霧也にだけは気を許せたし、霧也にだけは自分を見せれた。
いつしか霧也が全てになっていた。
霧也の為ならなんだってしよう。必要とあらば悪事にだって手をそめよう。
霧也が望むものは与えてやりたい。
霧也の望む関係になりたい。霧也のことが大好き。霧也もそう言ってくれた。
なのになんでこんなことになるのだろうか。
そんなことを神様に問いかけて問いかけて毎晩毎晩飲めないお酒を飲んでいる。

「古園、帰ったぞ」
「ただいまぁ～今日の収入は半端なかったでー美佳ちゃん～」
「１００００００円。」
「…そう。」

いつの間にかイタリア人の似非土佐弁、似非京都弁はとれている。
そして、美佳は異常にそっけない。理由は前述の通り。

「今日の晩御飯は美佳ちゃんの好きなカルボナーラぁ～」
「塩のおにぎりも。」

「ほら、古園。好物ばかりだぞ」
「うん、ありがとう。」
「今から作る。待ってて。」

ガチャリとドアの開く音がする。
その中に、一人の姿。
ぼっさぼっさの長い髪の毛。
目をこすりながらゆっくり、ゆっくりとソファーに向かい。
そして、ぱたっと倒れこんだ。

「みんなおかえり…」
「アクアちゃんも、何元気なくしてるんすかー。明るくいないと、霧也帰って来た時に悲しみますよ〜？」
「霧也は、死んだの。もういないの…いくら思念送っても…だめ。もういないの何処にも…居ないもん…」
「ほらぁ、また泣く〜…なんぜー？
悲しいのはわかるけど、こういう時だから明るくしとくんさぁ」
「そうだ。こういう時だからこそだ。アクア、お前が生まれてからずっと霧也の傍に居たのは分かっている。だが、いつまでめそめそしているつもりだ？　そんなお前の姿をあいつが望んでいるとでもおもうか？」
「それは…」
「古園もだ。本当にあいつの事を想うのであれば、明るくいろ。あいつは楽しいのが好きだった。違うか？」
「そうすよ、美佳ちゃん。アクアちゃん。
…そうだ、今度みんなでイタリア旅行行くっす！」
「ふぇ…？」
「賛成。イタリアで心身ともに休める。良い考え。」
「そうだな、それは良い考えやもしれん。俺も賛成。」
「二人が反対したってー、多数決で決まりっすよ」

「…わかった。ありがとう」

霧也が消えた後。いろいろあってみんな変わってしまった。
イタリア人二人ですら、口調も態度も変わった。
カッミノは土佐弁から、「〜っす」と変わり、性格は少しおとなしくなった。
コッロは、以前から無口だったが。ほんとに無口。単語単語の言葉しか喋らなくなった。

唯一宗だけはさして変わらない。
美佳やアクアは言うまでもなく…酷く荒んでいる。
大好きな人がいなくなれば誰だって荒む。
美佳にとっては恋人を失い、アクアにとっては兄妹のようなものを失った。
そんな途方もない喪失感は、味わった人間にしか分からない。いくら綺麗事を並べたところで同じ傷を持った経験のある者にしか癒すことはできないのだ。

アクアは、生まれてずっとずっと霧也と一緒だった。一緒に訓練を受けて、一緒に戦場を駆った。
いつも一緒。二人で一人。
この関係は絶対壊れない、何があっても続く。
そう二人は信じて疑わなかった。

お互い言葉では表せないほどの信頼関係で結ばれ、笑って。笑って。
笑って。泣いて。泣いて。泣いて。泣いて。
怒って。
ずっとずっと…
だけど現実は違った。
壊れてしまった。なんで？
そんなもの神様でさえも分からないだろう。
自分達は神に見捨てられたのか？
自分達は普通の人間ではない。神を信仰している者が。神を侮辱するような存在なのだ。
神も見捨てるだろう。

「Dio.
Voglia quello che noi portiamo a termine sia corretto?
Voglia il modo che noi superiamo avanti sia corretto?
Per favore l'insegni.
Il fato sar? vero?
Se Lei lo decide, io sopporto piuttosto un rancore.」

？　？章「消えた後の世界」（後書き）

イタリア語の部分は、
ルビの振り方わかんないんですよね。。

さてと、感想は
ブログの方に
おまちしてます

こっちでもいいですよー^^
http://playlog.jp/gzza/blog/

お待ちしてますね^^

？　？章「深い海に沈んだ少女達」

？　？章「深い海に沈んだ少女達」

深海のような深い心に沈んだ二人の少女。
美佳とアクア、本名・雫。
今は深い深い闇に飲み込まれて消えた人を想い、沈み込んだ気持ちのまま、イタリア旅行の準備をしている途中だ。

「二人とも～、準備はできたかい」
「ん、まだ。」
「あともう少しってとこね」
「そうかぃそうかぃ～、まぁゆっくり準備するさー。出発は明日だし」

そう言って家から出ていくコッロ。
あの時と変わらない街の中を歩き、一人何を思うのだろう。
日常とは脆く儚いもの。
数年前、それを実感したつもりだった。
なのに改めて今思う。
どうして、こうなったのかと。
どうしてこのような結果に。
このような結果になったのだろうと。

あぁ、そうだ。始まりは全て…
あいつのせいだ。あいつのせいで、俺の人生はめちゃくちゃ。親父を殺し、せっかく友人になれた人まで殺そうとした。

ただ、命令されたってだけで。
人に与えられた事をただやるだけ。
浅薄な人生だ。
今まで、無駄に過ごしてきたと言ってもいいだろう。
己の能力に誇示し、しがみついてすがっていただけだ。
だから、今回は…きっちり自分で決めたことをきっちり最後までやり通そう。
霧也を助けよう。
だけど…
その前にまずは、あの二人だ。
コッロはアクアと美佳の顔を思い浮かべて、ため息を一つ。

「とにかく、あの二人をなんとかしないことには、どーにもならんな…全く…」
「ただいまぁー、荷造りは終わったぜ?」

ほんの少しだけ歩き、帰って来たコッロ。
家の様子をぐるりと一周見まわす。
荷造りは…終わったようだ。

「終わったみたいだね」
「うん、終わったよ。」
「コッロお帰りやー、終わったよー。あたしが手伝ったらちょちょいのちょい、すぐさぁ。」
「ありがとうございます」
「姉やんありがとなぁー」
「お礼なんてええんよ、もう二人が見ていられなくって…全然進まんもんやから、やってあげただけ」
「頼りになりますね」
「うちの姉やんだからあったりまえー」

「そういえば出発っていつ？」
「ん、明日」
「早！」
「だから、今日はもう寝るぜよー」
「口調戻った！？」

――――翌日・イタリア・フィレンツェにて――――
空港から出て、真っ先に向かった目的地、フィレンツェ。
歴史的な建物が並ぶ街並み。
レンガ造りの家。
歴史地区には、大きな橋があり、そこから見える夕日はなんとも美しい。
沈んでいく太陽がルビーのように煌々と輝いている。イタリア４都市に入る有名都市で、歴史地区は世界遺産に認定されている。
ここはコッロ達の生まれ故郷でもあり、宗教信仰と結びつきの強い場所となっているのだ。

「さぁ、ついたぜー俺らの故郷っ！」
「うちらの街、フィレンツェ！　綺麗な所やさかい、ゆっくり観光でもしてってやー」
「はい。」
「じゃ、いくぜー」

コッロとカッミノを先頭にして歩きだす一行。
二人は異常なテンションで雫と美佳を案内する。

「これが有名な　サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂！
巨大なドームが特徴で、イタリアに

おけるゴシック建築および初期のルネサンス建築を代表する建物なんよ！」

「フィレンツェのシンボルにもなっていて、大戦後も奇跡的に残っているということから、さらに重要視されるようになったんぜよ」

「へー。」

「すごいですねー」

「地元やからねー、よくしっとるんよ。うちらは」

「この聖堂、見たことあります。大戦中に…結構来てたんですよ、フィレンツェ。」

「そうかいそうかい！　それはいいことだ、戦いの最中でも、ここに来ると癒されるからな」

「たしか、洗礼堂に“天国への扉”があるんですよね」

「そうぜよー、でも今の扉はレプリカであって、本物はあくまでも別のところに移されてるんぜよ。

前まではドゥオーモ付属博物館に置いてあったんだけど、今はある事件をきっかけにどこか奥深く出封印してるとかなんとか。」

「その事件っていうのがね…」

「なんですか？」

「天国への扉が、本当の天国への扉になったんぜよ。」

「はい？」

「要するに、扉が開いて、そしてその中に入った人がいたんよ。その人は、無事帰って来たんやけどね、その人の証言で…」

「神様に会った。といったらしいぜよ」

コッロはカッミノに覆いかぶさるように喋った。

「そして、死んだはずの自分の父親まで目にした。と…」

「そして、その時以来ずっと扉は開きっぱなし。近づくと吸い込まれるため、危険だと思ったその人が、扉を奪い。どこかに封印し

たっていう事件。」
「なんとも、変な事件ですね。そんなことがあるのでしょうか。」
「さぁ…わからない。」
「なんだったら、調べてみる？」
「ふぇ？」
「観光もかねて、調べてみたらいいと思ってね」
「お、いいんじゃないか？」
「なら決まり！　明日から調べましょう」

？　？章「地獄」

？　３章「地獄」

「とりあえず、ここが美術館？」
「そうやぁーここがドゥオーモ付属美術館～」
「ひっさしぶりぜよー」
「あれ、また二人共口調が…」
「さて、入るぜよ～」
「はぁ…」

とりあえず美術館の中へと入る。
中は、意外と明るい。
外観のイメージとは違う。
外観は少し暗い雰囲気がある。
それに比べて、内観は明るい雰囲気。
とりあえず、美術館の人に話を聞くことにした。

「すいません、以前あった天国の扉って…今は何処にありますか？」
「あぁ、それなら…ｉｎｆｅｒｎｏ　ｃａｎｃｅｌｌｏにありますよ」
「地獄門…なんかそれらしい名前ね」
「あぁ、地図をお渡ししますね…でも、近づかないほうがいいですよ。」
「はい、ご親切にありがとうございます。」

係員は奥へと消えて、すぐ戻って来た。
「はい、これが地図です。」
「ありがとうございます」
「いえいえ」
「さ、この地図を見ながら行くぜよ～」

〒±

Ｉｎｆｅｒｎｏ　ｃａｎｃｅｌｌｏ入口。
そして、中へと入って行く…
中は、薄暗くてよく見えないので美佳が電気で照らす。
そして、少し歩いたところに門があった。

「意外と早く見つかったわね」
「これだけ早く見つかると逆になにかあるんじゃないかって思うところねー。」
「とりあえず調べてみるぜよ～」

そう言ってコッロは門に触れた。
その時…
　突然門が開きだし、周りのあらゆるものを吸いつくした。
美佳達も同じように中へと吸い込まれ…消えた。

〒±

「…ここはどこ？」
「あ、雫！　目が覚めたぁ…」
「美佳ちゃん？　ここは…？」
「わからないけど…門に吸い込まれたみたいよ。」
「どこかの誰かさんのせいでね」
「うぐ…ごめん。」
「せめても仕方ないよ。とりあえず、状況を把握するためにいろいろ調べないと。」
「そうね」
美佳達はじめじめとした赤い地面を歩きだした。
当たりは鬱蒼としていて、地面は血の海のように真っ赤。いや…本当の血の海。
「気持ち悪い…」
「血の海ね…まさに黙示録。生者がいないのにこれだけの血…」
「まさに地獄ぜよ…」
「見て、何かいる…」
美佳は眼を凝らして前を凝視する。
一体何がいるというのか…
黒い…黒い体。太く、大きい剣。恐ろしく真っ赤に染まった瞳。
「まさか…」
「霧也…？」
「走るぜよ！」
「うん！」
一斉に走りだす。
まだ霧也…魔剣は美佳達に気付いていないようだ。
まさか、こんなところで会うとは…
誰もがそう思った。
生者がいない空間に突如として現れた魔剣、
霧也。
剣にはびっちりと血がついている。

もしかして、この地獄は魔剣が作りだしたのか。
「…！」
魔剣があわてて飛び立つ。
そして、一瞬のうちに…消えてしまった。
「逃げた！」
「くそ…！」
「やっと…会えたと思ったのに…」
血しかない世界。
その世界で再開を果たしたかと思われた霧也。
だが、すぐ飛び立ってしまった。
失意の渦にのまれながら、歩きだした一行。
果てない血の海。
本当の地獄が…ここにあった。
どこかの映画で見た黙示録のような…本当の意味での地獄。
そんな中、全員。
ただ、歩くことしかできなかった。
どこかへ歩いて、魔剣を追いかける以外なかった。
この地獄の中を彷徨い、ただ一人の人を探す。
そのために、歩く。

？　？章「地獄」（後書き）

展開が急すぎる…
急展開すぎますね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8458k/

俺が生み出す虚無の世界

2010年10月15日17時46分発行